



国際教育協力 ハンドブック

～現職派遣教員のための実践事例集～
付録DVD付<英語字幕入り授業映像(算数・音楽)/ハンドブックPDF版>



はじめに

—筑波大学附属小学校の教育拠点協力事業の概要について—

筑波大学附属小学校校長 田中 統治

ハンドブックを作成した趣旨について

本校は平成20年1月15日に創立135周年を迎えました。日本の附属小学校の中で最古の学校です。これまで日本中から先生方が初等教育の研修に訪れました。こうした現職研修の経験を国際協力にも役立てられないだろうか、そう考えたことがこのハンドブックを作るきっかけです。平成18、19年度に文部科学省「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業に応募して、JICA「派遣現職教員」への支援事業として採択されました。この実践事例集は19年度に行いました事業の成果物です。

19年度は帰国された隊員の先生方への支援事業のうち派遣経験を国際理解教育に活かすための活動を行ってきました。「現職教員特別参加制度」が創設されてから約7年を経て帰国された先生方もだんだんと増えています。その先生方187名を対象にJICA青年海外協力隊事務局が実施した調査結果によれば、「学校現場の中で派遣中の経験が活かされている」と回答する割合は70%にも達しています。ただ、帰国後、日本の多忙な学校現場では派遣経験を伝える機会が少なく、また、周囲の理解がえられず孤立感を感じるケースもあるようです。

そうした時に本校が出来る支援は何かと考えれば、一つには、帰国隊員のネットワークづくりを進めることです。そこで、立ち上がったばかりの「長野県教員等ネットワーク」の先生をお招きして授業実践のワークショップを開催し、また、本校の研究発表会場で特別分科会を設けて公開授業とパネルディスカッションを行い、注目されました。この他、全国附属学校連盟（全附連）の研修会でも附属学校がネットワークづくりに一役買うことを提案してきました。本校以外の筑波大学附属学校もこうした支援活動に協力してくれています。

もう一つが帰国隊員の実践事例集をハンドブックの形で刊行することです。そのために、筑波大学教育開発国際協力センター（CRICED）と連携して、メーリングリストによる実践事例の収集を行ってきました。ただ多くの事例が集まらなかったため、本校の教員に呼びかけて「私であればこう実践したい」という実践提案も加えています。本校の算数部は、JICAの事業に協力して、中南米などに派遣された経験をもっています。派遣期間は長くありませんが、現地の教員養成機関の関係者に模擬授業を行った先生にも書いてもらいました。このハンドブックは、隊員の皆様が派遣される以前から、また派遣中にも、帰国してから教育現場で派遣経験をどう還元できそうかを考えていただく参考資料として作成しました。

ハンドブックの構成と DVD について

この実践事例集は三つのパートに分かれています。第1は、派遣前の研修段階を考へて、これまでの派遣隊員の報告書を分析した結果をもとにオリエンテーションを行います。小学校教員として派遣された隊員のレポートを中心に、派遣中の適応ステップを分類して各段階で隊員が日本の教育との比較をどう行い、また日本の教育のよさや逆に学ぶべき点をどのように整理していくかをまとめています。これは事前研修でも扱われる内容ですが、ここでは「日本型教育実践」（以下、J.E. モデル：Japanese Education model）という視点からその長所と短所を考えます。たとえば、現地の人々が受け入れ、国際的に通用しそうな「よき教育実践」（Good practice）とは何かについて考えるための視点を示したいと思います。

第2は、帰国後を見通した現地での活動と実践事例の提案です。まず、JICA が実施しました調査結果をもとに帰国された隊員たちが、任国でどのように教育実践に取り組まれているか、その特徴と課題を考えます。これまでの調査結果によれば、教材や教具を含むカリキュラムの問題に直面されるケースが多いようです。そこで、任国でこのような教材を使ってみてはいかががですかという趣旨で、本校の教員が各教科別に授業づくりのヒントをまとめています。隊員の中には理数系教科への援助を依頼されたのに、他の教科や現職教育までお願いされる場合もあると聞きます。そこで、本校教員が専門とします、小学校の教科教育のほぼすべての分野から授業の提案を致します。

第3は、教育協力の体験を生かした国際理解教育の実践と題して、カリキュラム・授業づくりの基本的な考え方、帰国隊員のネットワークの作り方、そして実践事例（ワークショップで提案いただいたものを中心に）を掲載しています。とくに長野県教員等ネットワークの先生方にご協力をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。また、ここに掲載はできませんでしたが、帰国隊員の発表会や報告会の場でお聞きした実践例にも参考にできるものが多かったです。CRICED のサポート HP などをご覧ください。帰国された先生方がさらにパワーアップされ、教師として生き生きと日々の実践に取り組んでおられます。この実践事例集はその一部に過ぎませんので、文部科学省教育協力拠点形成事業の成果物を参考にさせていただきたいです。

また、付録として本校教諭による算数と音楽の授業実践の DVD とその解説を付けました。算数科は田中博史教諭による「2桁でわるわり算」（4年生）、音楽科は熊木真見子教諭による「音あそび」（1年生）の授業です。英語の字幕スーパーを付けていますので、ご活用いただければ幸いです。

国際教育協力ハンドブック～現職派遣教員のための実践事例集～

目次

はじめに 一筑波大学附属小学校の教育協力拠点形成事業の概要について—
筑波大学附属小学校校長 田中 統治 2

I 現地に赴く前に

1. 帰国隊員の報告書から 一派遣中にどのような支援ニーズをもつか—
筑波大学附属小学校校長 田中 統治 8
2. 国際教育協力（算数協力）の経験から
筑波大学附属小学校 山本 良和 12

II 現地での活動

現地での実践を豊かなものとするために ～授業づくりのヒント～

1. 国語 日本の文化を題材とした授業づくり
筑波大学附属小学校 青山 由紀 18
2. 社会 日本ってどこにあるの？どんなところ？
筑波大学附属小学校 鎌田 和宏 22
3. 算数 板書とノートを効果的に使って考える楽しさを味わう授業を
筑波大学附属小学校 細水 保宏 26
4. 算数 現地の子どものコミュニケーションを大切にする
筑波大学附属小学校 夏坂 哲志 30
5. 算数 計算の性質を活用する計算の工夫
筑波大学附属小学校 盛山 隆雄 34
6. 理科 現地の植物を使って、観察力を育てる授業を
筑波大学附属小学校 佐々木昭弘 38
7. 図画工作 子どもの「三種の神器」で「造形遊び」を一水・棒・土を使って—
筑波大学附属小学校 林 耕史 42
8. 家庭 日本の着物文化を伝える —「包んで楽しむ」—
筑波大学附属小学校 勝田 映子 46
9. 体育 体育の授業をもっと楽しく —ボールゲームづくりのヒント—
筑波大学附属小学校 木下 光正 50

10. 体育	体育の授業をどこでも楽しく —教材づくりのヒント—		
		筑波大学附属小学校 清水 由	54
11. 道徳	日本の伝統文化を学ぶ —「おはし、ちゃんと使えないの?」—		
		筑波大学附属小学校 加藤 宣行	58
12. 帰国後の教育実践のための具体的な準備			
		筑波大学附属小学校 鎌田 和宏	64

Ⅲ 教育協力体験を生かした国際理解教育の実践 ～帰国隊員等の国際理解教育実践の実際～

1. 帰国から長野県教員等ネットワークの立ち上げまで			
	長野県須坂園芸高等学校	北原三代志	68
2. 長野県教員等ネットワークの設立と JICA 駒ヶ根の連携			
	元 JICA 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所	西山真由子	76
3. JICA 駒ヶ根と連携しての国際理解教育の実践			
	—世界情報センター設置とその発展活動—		
	長野県中条村立中条小学校	西澤 浩	86
4. グローバルイシューから考える国際理解教育の実践			
	長野県塩尻志学館高等学校	駒村 英明	96
5. 帰国後の活動より			
	—カンボジアとのインターネットライブ交流授業に取り組む—		
	長野県小諸市立美南ガ丘小学校	中山 晴美	104
6. 協力隊経験（パラグアイ・音楽）を生かした国際理解教育の実践			
	相模原市立上溝小学校	小澤 明子	116
7. 帰国隊員をゲストティーチャーに招いた国際理解教育の実践			
	筑波大学附属小学校	鎌田 和宏	124

Ⅳ 授業実践 DVD 解説

1. 付録 DVD の活用方法について			
	筑波大学附属小学校	鎌田 和宏	134
2. 算数 帰納的な発見を楽しみながら計算に親しむ子どもを育てる授業			
	4年「2けたで割るわり算」の授業から		
	筑波大学附属小学校	田中 博史	136
3. 音楽 音楽授業の実際 1年「音あそび」の授業から			
	筑波大学附属小学校	熊木真見子	140



I 現地に赴く前に



帰国隊員の報告書から —派遣中にどのような支援ニーズをもつか—

筑波大学附属小学校校長 田中 統治

日本の教育実践をどう相対化するか

現在、事前研修を受けておられる皆様に、過去に派遣された隊員の方々の報告書をもとに、どのようなことで困り支援を必要とされたかについて情報提供したいと思う。日本の教育経験がそのままでは通用しないときに、隊員がそれをどう克服しようされたか、ヒントになれば幸いである。

ここでは、小学校教諭として派遣された、平成15年1次隊から平成17年2次隊までの159名分（算数、理科、音楽科）の報告書を取り上げる。このうち69名分が派遣現職教員で、90名がこの制度を利用していない方である。地域の内訳は、北米・中南米（66人）、大洋州（38人）、アフリカ（27人）、アジア（26人）、及びその他（2人）である。

適応の仕方は任地国、地域の特性、あるいは何代目の隊員かなどの事情によって異なる。したがって解決策を一般化することはできない。しかし、日本の教育を異文化の目を通して比較（相対化）した経験は同じである。この経験を通して日本の教育の長所・短所をしっかりと見極めることが、教師としての専門性と総合力を高めることになる。以下、現地での適応段階とそこで直面した困難と支援ニーズ、そして解決策のヒントと帰国後をにらんだ対応の順にまとめてみることにする。

2年間の適応段階

協力隊員が自文化から異文化に適応する際のカルチャーショックや、派遣先の文化から自文化へ再適応する際のリエントリーショックに伴う困惑や悩みなどはこれまでも指摘されている。では教員の場合はどうなのだろうか。報告書の分析からわかったステップは図1の通りである。

まず「生活文化・教育文化適応期」では派遣された直後で情報不足も合い重なり、目の当たりにする現実にカルチャーショックを覚え、現地の情報を集めながらその文化に適応しようと試みる。現地の人々とコミュニケーションをとるときに語学力の不足を感じ、学校では運動グラウンドや音楽室、教室などの物資の不足に加え、教員の意識・自覚の不足、授業中に子どもの発言を許さない、体罰を容認する教育文化への驚きが目立つ。音楽教育で派遣された隊員の場合、情操教育の普及という要請があったにも関わらず、教科として時間割に組み込まれていないことに戸惑っている。やがて、現地の情報が集まり、現地の教員と一緒に活動する機会も増えていく。

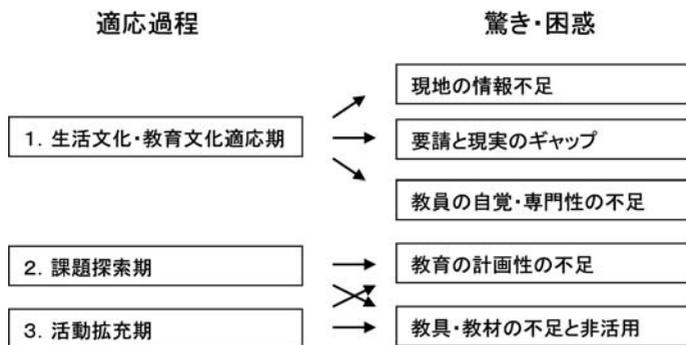


図1：派遣隊員による異文化への適応過程

最新の教科書が配布されていない、過去の隊員が残していった教材が十分に利用されていない、シラバスなどの教育計画に無理があるなどの問題点に気づく。「活動拡充期」ではできることを模索しそれを実行し続ける隊員が現れる。配属された学校だけではなく、必要であれば派遣国の教育省に働きかけたり、教員養成機関で活動を行ったりと活動の幅を広げている。教科書が不十分であればそれを現地語で作成したりするなど日本で経験していない事柄にも挑戦している。

理想と現実のギャップに悩む「役割葛藤期」を迎える場合もある。背景には現地国の学校に一人で派遣されるという問題がある。2年間の派遣期間中に、現地国の教員への「技術移転」を目的に派遣されているにも関わらず、実際には補助員としての役割しか果たせていないことへの苛立ちなどが起きる。たとえば、「教員の意欲の無さに自分が負けてしまい実現できなかった。教師への働きかけは子ども以上に大変であり、成就しなかった」という記述などに隊員の葛藤の様子が読み取ることができる。

派遣先の教育実践への困惑のタイプ

日本では当たり前と思っていたことが通用しない場面に困惑や驚きを覚える。自文化の教育実践を正当化してしまいがちだが、派遣隊員による実践は現地国の教員にとっては異文化である。隊員が現地の教育実践に感じた困惑や驚きを整理してみると、まず、教育課程の国家基準とシラバス・教科書との不一致、教科内容の構成や時間配分の不適切さなどの教育課程に関する問題点がある。また、指導方法、教員の資質と専門性、学級文化といった教育方法・条件面の違いがある。また、たとえば、算数で「数の概念」や、音楽で「音階」などの基礎的内容の理解不足が低学年だけでなく、高学年の児童にも見られるという実態への戸惑いが起こる。その原因は教育の計画や実施段階にあると考えられる。

そこで、どの程度の割合で困惑を感じているかを調べたところ、図2のように、最も多くの隊員が指摘した問題が「教育課程」についてであり、次に、「教員の資質」が半数を超えている。

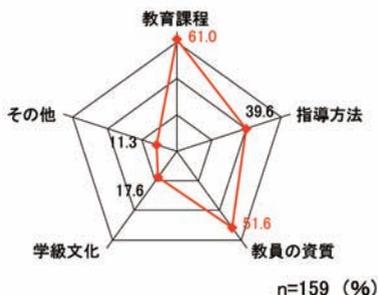
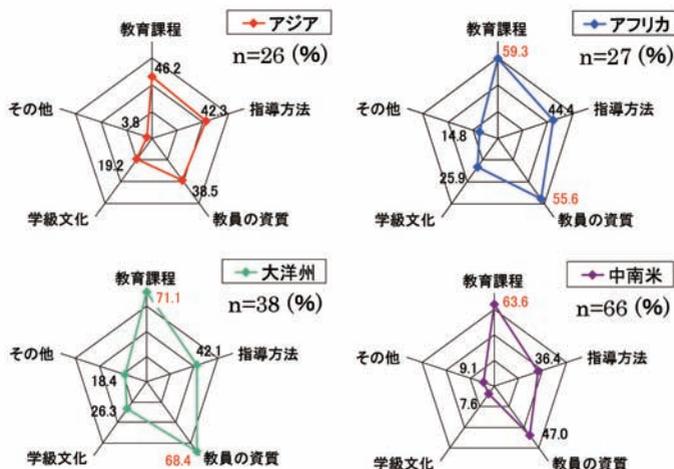


図2：派遣隊員が感じた驚きや困惑の割合

また、派遣地域別に同様の割合を調べてみると、基本的には「教育課程」と「教員の資質」に関する記述が多いことが特徴として挙げられるが、地域差もみられる(図3)。大洋州に派遣された隊員の報告書には、「先生の苦手のひとつが計画を立てることである。年間計画、学期ごとの計画、明日の授業の計画を立てるのは、その日暮らしの生活から考えると計画を立てること自体が日常化していないので少し難しいものであるようだ」と書かれており、計画性がものをいう「教育課程」が根付いていない文化的風土による影響が推測される。

図3：派遣地域別における派遣隊員が感じた驚きや困惑の割合



解決策のヒント

「教育課程」を例にとると、解決へのヒントは教科書・教材を子どもの実態に即して改良することだ。たとえば、「カリキュラム自体、アメリカの教科書会社がつ作ったものをそのまま使用しており、生徒の実態に全く合っていない。アメリカの教科書は、スパイラル（らせん状）形式での指導には適しているが、系統的に積み上げて指導するには、余分な単元を省き必要な単元を捨てるといった作業が必要となり、カリキュラムを熟知する必要がある」という指摘がある。こうした教科書改良の試みでは、日本型実践の特徴を活かして教育内容を選択・改作している。ある隊員は、欧米の教科書をそのまま用いているマーシャル諸島で、計算の手続きの習得を重視する「欧米型」では子どもが数の概念の意味を十分に理解できないと考えて、具体物を利用した数の理解、“make a ten”といった数をまとまりとして捉えることを重視する日本型実践の特徴を活かしている。

この他に、教室の指導場面では、「教師が生徒から見えにくいところに板書をし、生徒が板書をノートに写しても、果たして後から役に立つのかと首を傾げる場面が多く見られる。板書が生徒の理解につながっていない」と感じたケースでは、日本の教師が行う板書計画や机間巡視などを紹介している。また、「一斉授業型で教師が話す時間が長く、児童に発問する時間が少ない。教師の考えに、子どもとともに授業を作っていくという概念がないため、児童はとても受身である」と問題点を感じたケースでは、それを指摘するのではなく、子どもとともに授業を作り上げようとする「日本の授業」を見せて、子どもが活発に学ぶ様子から改善を提案している。

帰国後を見通して

このように、派遣経験では、日本型の教育実践の長所と短所を再認識することが多いようだ。国内では実感しづらいが、教育のよさとして、教育課程の効率性の高さ、教材・教具の豊富さ、そして教師の専門性の深さなどがよく指摘されている。帰国してから、どこがどう優れていると感じたかを伝えるため、メモや資料などを作っておきたいものである。

また、帰国してから子ども観や能力観が変わったという隊員も多く存在する。たとえば、ホンジュラスでは「子どもたちは年上や親から無条件に愛される存在である」ことに感動して、「これまで子どもを能力で見がちで、とかく競争をあおってしまう部分があった」ことを反省している報告もある。

いずれにしても、教員の派遣経験は、教育実践の質的な問い直しにつながるもので、現職研修としての意義がきわめて大きい。この経験を教育現場と地域社会に還元して、日本の「内なる国際化」に役立てたいものである。そのためにも、帰国してから行いたい実践活動を具体的にイメージしながら、準備とネットワークづくりを進めていきたい。

国際教育協力(算数協力)の経験から

筑波大学附属小学校 山本 良和

1. 私の算数協力の経験

2006年10月7日～22日、私はJICAの算数教育の短期専門家として中米のニカラグア、エルサルバドル両国に赴いた。

中米5カ国（ホンジュラス、ドミニカ、ニカラグア、エルサルバドル、グアテマラ）が、それぞれの国の算数の教科書及び教師用指導書作成、あるいは教師の授業力量の向上に関する支援をJICAに求めてきたのだ。その趣旨は理解できる

し、私でお役に立てるのであれば支援したいと思った。ただ、中米を初めて訪れる私にとって、そのとき「不安ではなかった」と言えば嘘になる。

まず、私は中米の公用語であるスペイン語が話せない。現地には日本人の通訳がいるとはいえ、一人で成田からニカラグアの首都マナグアまで移動することから一苦労という状態であった。

また、持参する服装や荷物の内容を検討する上で欠かせない現地の情報（気候、文化、治安等）が、事前に日本では十分に得られなかったということも不安材料の一つであった。結局得られた情報といえば、いずれの国も治安の悪い危険地域とされているということだけだった。

ニカラグアで実際に支援活動をしたのはチナンデガ県という地方都市である。マナグアから車で2時間ほどかけて出向いた現地の小学校は、込み入った市街地にあった。敷地は狭く運動場もない。その上、教室には照明もないし、暑い。ただ、それでもまだ環境が良い学校らしく、多くの学校は屋根もないと聞いた。

また、日本と違い、学校の中に駄菓子を扱う屋台があった。先生も子どももコーラやお菓子を自由に飲食している。一方、学校の校門には拳銃やライフルを持った警備員が立っていた。余談だが、ホテルやレストランなどの店先でも警備員が立っていた。私は最後までこの光景には閉口した。

ニカラグアで参観させていただいた算数授業はどれも教え込みの授業で、教師が指示することを子どもが繰り返して練習するようなものばかりだった。たとえば1年の授業であれば、ただ数詞を唱え、「10がいく



●ニカラグアの子どもたちと



●学校内の屋台

つとばらがいくつでは？」と同じようなことを繰り返すだけである。10のたばにして教えるよさに子どもが気づくような手立てが不足している。また、教師にも笑顔がなく権威的な態度で授業に臨んでいるし、なんだかやる気も感じられない。その上、授業の1単位時間は90分。子どもがこんなに長く集中できるはずがない。

教育環境や教育システムには種々の問題があるが、物理的なことは国の経済的な理由から簡単には改善が望めない。だから、JICAの支援対象は算数の教科書作成と授業改善である。それは、現地の教師に対して教師観や算数授業観の改善をもねらっている。

ただ、現地の教師のやる気のなさにもいろいろな原因があることがわかった。その1つは教師という職業に対する待遇の悪さである。この国では、一家4人が月\$200(約24,000円)で生活できるらしいが、初任者教師の給料は\$80(約9,600円)。これではやる気が出ないのも無理のないことかもしれない。

さらに、小学校における落第制度の存在が彼らの教師観を歪めているように感じた。たとえば学習の成果が上がらない子どもがいても、「その子どもがバカだから」と平気で口にする教師の姿を目の当たりにしたときには正直驚いた。つまり、教師

●エルサルバドルの子ども



●チナンデガ県の授業風景



●エルサルバドルでの「かたち」の授業

は子どもの落第の決定権を持ち合わせているので、自分自身の授業の内容を反省的に振り返るという思考様式を全く持ち合わせていないのである。私にとっては、このことが一番衝撃的な事実であった。

私は、ニカラグア、エルサルバドルの1年生を相手に算数の「かたち」の授業を行ってみたが、何れの国の子どもたちもとても可愛らしく、目新しい学びには素直に瞳を輝かせていた。学ぶ子どもの目の輝きは世界共通であるということを改めて確信した。

なお、「かたち」という授業の内容は現地からの指定だったのだが、既に子どもたちは「かたち」の学習を終えているようで、教室の掲示物にも図形の名前が整理されていた。しかし、中米の先生たちは、「かたち」の学習ではそれぞれの形の名称を教えるだけで、それ以外にどんな学習活動を設定したらよいかわかっていなかった。

私が行った授業は、箱を使って平面に絵を描くというものである。つまり、立体図形から平面図形を写し取る活動をさせる中で、立体図形の構成要素である面の形に着目させようと考えたものだ。

私はスペイン語がわからないし、日本とは教室環境も異なるので、いろいろな点で不自由であった。しかし、今回の授業を通して、形の名前を知るだけではない「図形を見る見方」や「図形感覚」を育てていくことの重要性を伝えることができたと思う。とにかく、中米の子どもたちの愛くるしい笑顔が見られたことが何より嬉しかった。

ところで、ニカラグアと比較してエルサルバドルでは教育省の役人を始め、現地の先生たちも本プロジェクトに対して熱心に取り組んでいた。対象国の体制によってプロジェクトに取り組む現地スタッフの動きは異なる。対象国によって算数のカリキュラムが異なっていることはその要因の一つであるが、それぞれの国の経済状況や文化、あるいは国民性にも左右されている。



●教室掲示



●エルサルバドルの教育省にて

2. 現地に赴く前に心構えとして意識しておきたいこと

(1) 支援対象国の内政干渉とならない支援を

多くの開発途上国では、先進国に負けない教育の実現を目標とし、日本でいう学習指導要領にあたる国の教育課程（カリキュラム）を法律で定めている。

ところが、それらの多くは、指導内容と指導時数の整合性が取れていない。つまり、指導すべき内容は先進国と変わりはないが、実際の授業時間は非常に少ないという矛盾を抱えている。

ただ、だからといって支援対象国のカリキュラム自体を非難（否定）することはできない。飽くまで我々の役割はその国の支援であって、政治に立ち入るべき立場にいないということを弁えておく必要がある。

(2) 支援対象国の国民が抱く愛国心を尊重する姿勢

ニカラグアとエルサルバドルに赴いて実感したことであるが、それぞれの国民は

自国に対する愛国心をしっかり抱いている。愛すべき自分の国を平和で豊かな国にしたいという強い思いを持っているわけである。だから、当然、自国の文化も大事にしているし、誇りも持っている。

我々日本人スタッフは、対象国及びその国民や文化・伝統を尊重する姿勢を持ち合わせていなければならない。また、自分自身も日本に対する愛国心を持ち、日本の文化・伝統を尊ぶ姿勢を対象国の人々に示す中で意味のある支援ができるものだと考えられる。



●天童舞踏を披露してくれた教育養成学校の生徒

(3) 日本のやり方が優れているという錯覚

我々は支援する側として関わるわけであるが、日本の方法が何でも優れていると考え、それを対象国に押し付けるのは好ましくない。

算数を例にすると、「りんごが2個入っているかごが3つあった」場合、日本ではりんごの総数を「 2×3 」と表現する。ところが、中米では全く同じ事象を「 3×2 」と表す。実は、この違いは日本語とスペイン語の文法上の違いに起因する。

あるいは、日本で計算処理に用いる四則計算の筆算形式と対象国のそれとが異なっていることもある。多くの日本人は自分が使っている筆算形式が当たり前であり、世界共通だと思っている。しかし、実はそうではない。筆算形式も日本の1つの文化なのである。

もし、日本方式のかけ算の式表示や筆算形式を支援と称して何も考えずに対象国に押し付けるならば、支援の効果が上がるどころか逆に混乱する。対象国の言語や文化を十分吟味しながら具体的な支援内容を検討していくことが重要である。

(4) 現地の状況を把握した上での支援

開発途上国の場合、日本と比べて物品は乏しく、インフラを始めとした生活環境も大きく異なっている。かといって、それを嘆いていても仕方ない。現地の状況を把握し、具体的に支援できることから始めるしかない。つまり、「無いものねだり」はできないということである。

(5) 現場の支援のみならず教員養成課程からの支援

支援の多くは現場を対象としている。それは大事な活動であるが、教員養成学校の段階から支援するという視点を持つことも重要である。長いスパンで考えたとき、その効果は必ず近い将来に現れてくる。



●教育養成学校での講義



Ⅱ 現地での活動

現地での実践を豊かなものとするために ~授業づくりのヒント~



日本の文化を題材とした授業づくり

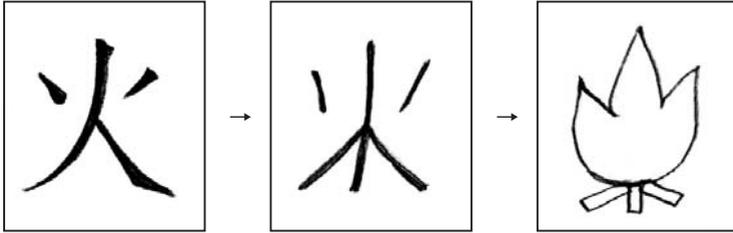
筑波大学附属小学校 青山 由紀

1. 日本の伝統文化を題材とした授業づくり

(1) 漢字の成り立ち

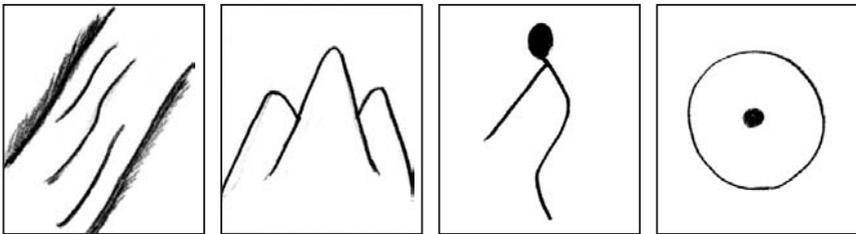
漢字は大変興味深い文字として、外国の人の目には映る。そこで、どのような国や地域、年齢でも分かりやすい、象形文字の成り立ちを取り上げ、クイズ形式で紹介する。

- ① 「火」「川」「山」「人」「日」を示し、日本の文字であることを説明する。
- ② 「火」の文字から順を追って見せながら、もとになった物を示す。



このように、漢字の中には物の形や様子からできたものも多いことを伝える。

- ③ 先に示した他の漢字は何を表しているか予想させる。
 下のようなヒントを出して選ばせてもよい。



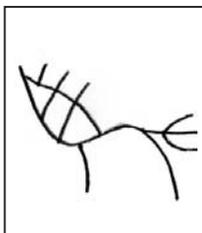
〔補足〕

- 取り上げる象形文字は、その国や地域で目にするものから選ぶとよい。
- 「木」を入れておくと、「木」が二つで「林」、三つで「森」を当てさせるクイズもできる。
- 漢字の成り立ちの絵が載っている漢字辞典を持参しておくと便利。
- 「鳥」「馬」「魚」など動物や、「口」「目」「耳」など体の部分も、興味をもたせるのに適している。

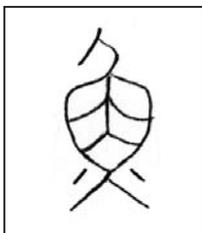
【例】 鳥



馬



魚



耳



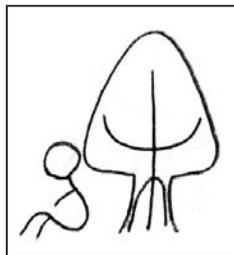
(2) 漢字の組み立て

「漢字の成り立ち」に加え、さらにそれらの部分を組み立ててできた漢字をクイズ形式で紹介する。

①「休」という漢字を示し、どのような意味をもった文字か考えさせる。

ヒントとして、にんべんは「人」を表し、「人」+「木」と考えるとよいことを伝える。

右のような、絵のヒントを与えてもよい。



②「漢字の成り立ち」ゲームで取り上げたものをヒントとして提示しておき、それらを組み合わせてできた漢字を出題する。

「岩」「鳴」「明」「男」などは問題に適している。

(3) 書道(習字)

毛筆で文字を書くことは、文字、パフォーマンス、筆や墨といった筆記具など、日本文化を紹介する多くの要素を含んでいる。

現地で筆を使い、紙に書いて見せるのが、相手に一番分かりやすい。したがって、筆や墨(墨汁)、半紙(和紙)などを持参するとよい。全ての道具を持って行かなくても、筆さえあれば、水をつけて黒板などに書いたり、さらに墨をつければ板など紙以外のものを書いて見せるなどのパフォーマンスが、場や状況に応じて可能である。

俳句や短歌を紹介する授業とあわせ、筆ペンで簡単に墨で文字を書いて見せることもできる。

状況によっては、あらかじめ筆で書いたものを持って行き、見せるだけでも、日本文化を伝える授業となり得る。

(4) 絵手紙

毛筆の文字とともに、絵を添えて表現する「絵手紙」も日本の四季や風物詩などを紹介するのに適している。海のない地域には海を題材にしたものといったように、赴任国では目にしないものなどを題材とした絵手紙を描いて持参する。



また、現地の人や物をさっと描いて見せるのも効果的である。その場合、筆ペンのカートリッジ部分に水を入れる水筆ペンと固形絵の具、紙さえあればよい。筆洗いやパレットといった道具をいくつも使わずに、1本の筆だけで絵を描いたり、文字を書き添えたりすることができる。紙は、はぎ取り式のものが便利である。はがきから八つ切り（B4）サイズまで、手頃な価格で様々ある。水筆ペンや固形絵の具、はぎ取り式画用紙、いずれも大型文具店で手に入れることが可能である。

(5) 俳句・短歌

俳句や短歌は、「世界ハイク」という言葉もあるほど、世界的に楽しまれている。日本の伝統的な俳句や短歌を英訳した書籍もある。それらを参考に、俳句とは限られた言葉で季節の風物や思いを読む最小単位の詩文学であることを紹介することができる。

児童向けには、児童の詠んだ俳句や短歌を紹介する方が、感覚的な理解を得やすい。絵や写真が添えられているため、理解しやすいという特徴もある。日本の児童が詠んだ作品の英訳、海外の児童が詠んだ作品など、様々なタイプの俳句や短歌を簡単に入手することができる。

〔参考文献〕

●夏石番矢編著『ちびまる子ちゃんの俳句教室』（集英社、2002年）

●夏石番矢／世界俳句協会『世界俳句2006』（七月堂、2006年）

〔参考・インターネット検索〕

●日航財団ホームページ・全国学生俳句大会

●キッズはいくガーデン <http://homepage2.nifty.com/haiku-eg/hp.html>

2. 現代の日本文化を題材とした授業づくり

(1) まんが

日本のまんがやアニメは、今や日本文化の一つとして海外でも認知されるように

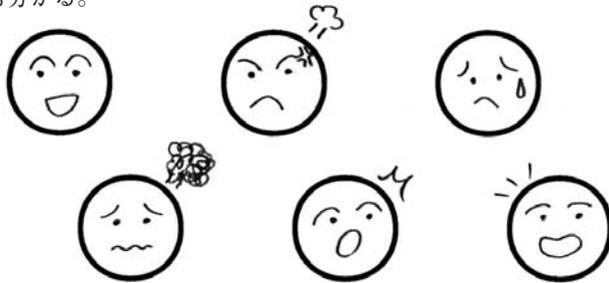
なった。まんがは言葉が分からなくても、絵とその手法で、どのような内容か理解できる。言葉の壁を超えたをまんがを素材とした授業づくりも可能である。

「まんが文法」とも呼ばれるまんが特有のきまりごとがある。それらが理解されていないと、いくらまんがを持ち込んでも効果を発揮しない。まんがには、1コマまんが、4コマまんが、ストーリーまんがなど様々なタイプがあるが、ストーリーまんがには、次のようなきまりごとがある。

〔「まんが」のきまりごと〕

- 上から下へ、右から左へ読み進める。
- 大きなコマは、強調したい場面や、重要な場面である。
- 絵の人物の位置と吹き出しの位置でだれの台詞かが分かる。
- 吹き出しの大きさや線の種類によって、強い言い方、弱々しい言い方、そのときの気持ち、回想している事柄などが分かる。
- 文字の大きさと太さによっても言い方や感情などが分かる。
- 顔の様子や表情が単純化されて描かれている。

例えば、涙や汗を意味するマークをはじめ、気づき、怒りなどそれぞれ意味するマークから理解する。また、驚き、喜び、怒りなどの表情も単純化された顔からでも分かる。



- 背景の模様によって人物の心情が分かる。

指導者は、以上の「まんがの方法」を踏まえた上で、まんがを使ってコミュニケーションをとったり、日本文化を伝えることができる。以下、クイズ形式の授業を紹介する。

- ① 4コマまんがやストーリーまんがの結末部分を伏せて提示する。
- ② 結末部分を予想させる。

このとき、提示したまんがの内容が理解されていないと感じたときは、先に示した「まんがの方法」のいずれに原因があるのかを探り、補足説明する。

〔補足〕

- 日本の生活習慣を知らないと理解できないものは、導入には適当でない。『ドラえもん』や『ポケットモンスター』『ドラゴンボール』など、海外でも出版されている物を取り上げるとよい。

日本ってどこにあるの？どんなところ？

筑波大学附属小学校 鎌田 和宏

1. 授業の概要

赴任国では、自分について紹介する機会が数多く訪れる。その際に「日本はどこにあるのですか？」「日本はどんなところなのですか？」とたずねられる。日本から国際協力に赴任した立場としては正確に伝えたいところである。しかし、何を伝えるべきであろうか。地球儀、地図、写真等を使って、当該国の人々に日本のことを知ってもらう第一歩として、まずは日本の位置と地理的な特色を知ってもらいたい。

2. 授業づくり 準備のポイント

(1) 『物の準備』赴任する前にしておきたいこと

日本を出国する前に準備しておくといよいものがある。

- ①地球儀
- ②日本全図
- ③日本を紹介するための絵はがきや写真

①の地球儀だが、通常のをを用意すると大変かさばる。最近はビーチボールのように、空気でふくらませる方式のものがある。2,000～3,000円程度で入手できる。それを持って行くとよいだろう。学校と取引のある教材店や地域の地図専門店に相談してみるとよいだろう。地名等が英語表記されたものは、輸入地図専門店のマップハウス（〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-12 太陽堂ビル TEL03-3295-1555）で入手できる。インターネット経由での通信販売も行っている（<http://www.maphouse.co.jp/>）。このふくらませて使う地球儀は安価なものでは百円ショップで売っているものまである。ただ気をつけておきたい点がある。教材として販売されているものはたいい問題はないのだが、町で安く手に入れたものには注意しておきたい。以前、中華民国を台湾島と表記してある



地球儀が売られていたり、中華民国の首都を南京であると表記してあったりする地球儀が売られて話題になったことがある。領土の問題にはそれぞれの国の主張があり、表記の面でもそれが反映されている場合があるのだ。

②の日本全図であるが、①の地球儀同様、教材店や地図専門店、書店で購入することができる。おすすめは国土地理院発行の「500万分1日本とその周辺」である。日本全土と周辺国が1葉に記載された地図で、正確な地図である。また3葉になるが、英語表記の「100万分1INTERNATIONALMAP」もよい。国土地理院発行の地図については(財)日本地図センターで調べるとよい。ここではインターネット経由での販売(通信販売の案内もある)にも応じている(〒153-8522 東京都目黒区青葉台4-9-6 <http://net.jmc.or.jp/>)。これまた百円ショップでの購入も可能であるので現地の学校に差し上げてきたいと考える場合、そちらも見ていただくとよいだろう。



③の写真であるが、どういうものを持って行くか悩むところである。北の北海道の雪の風景、南の沖縄の南国風景、平地が広がる庄内平野の稲作の風景、山地の白川郷の風景や首都である東京のビル街の風景、世界遺産にもなっている京都の神社仏閣のある町の風景等は代表的な風景になるだろうか。建物や町の様子だけでなく日本製の工業製品(自動車や家電製品)お祭りの風景などの伝統行事の様子などもあるとよいだろう。絵はがきは書店や地域のお土産物店の他、インターネット上で検索すると全国各地の絵はがきを販売しているサイトが見つかるのでそれを通して購入することができる(例えば京都の絵はがきは山口青旭堂で購入できる <http://www.seikyokudo.co.jp/>)。また、外国人向けのおみやげもの店などでは日本を紹介する絵はがきなどもあるので、それを利用する手もあるだろう。要は日本をどこの画像で紹介するかということなのだが、忘れてはいけないのが赴任される隊員の方が勤務されている学校の写真である。子どもは子どもに関心を持つ傾向がある。日本の子どもはどう暮らしているのか興味を持ってもらえるようであるので、日本の学校のたたずまいや、中での子どもたちの生活の様子(学習、遊び、給食、行事など)がわかる写真をできれば大きめにプリントアウトして持って行きたい。加えて日本を紹介する時の参考資料となるので小学校5・6年生の社会科教科書を持って行くともよいだろう。

3. 授業づくり 実践のポイント

日本を紹介する際にポイントになるのは、赴任国と日本の関わりを意識しながらすることである。以下、日本を紹介する授業の例をあげる。

(1) 日本ってどこにあるの? ~地球儀を使って赴任国と日本の位置関係を示す~

地球儀を使って、まずは赴任国がどこであるか探させる。子どもたちに自分たちの国がどこか分かったら、先生の国、日本を探してもらおう。英語表記の地球儀であれば JAPAN を手がかりに探せるかもしれないが、そうでないのならいくつかヒントを出すとよいだろう。赴任国までどうやってきたのか、簡単なルートを話してもよいだろうし、日本列島の形を見せてもよいだろう。赴任国と日本の位置が確認できたら、その双方にシールなど目印になるものをはり、赴任国から見て見、日本はどの方向にあるのか、またどれくらい離れているのかを調べさせたい。どれくらい離れているのかは2点間の長さをひもで測り地球儀の縮尺を元に計算する(例えば直径32cmの地球儀は4000万分の一であるから、実測した長さの4000万倍すればおおよその距離が出るわけである)。

(2) 日本ってどんなところ? ~日本全図・写真を使って日本を紹介する~

位置や方向が分かったところで、日本全図を示したい。日本は南北に長く四季の変化のある(近年温暖化で少し変わってきてしまっているが)島国であることを具体的に話したい。

1) 日本列島は南北に長い島である

日本全図を見てもらうと日本が南北に長く連なる列島であることが分かる。長さ約3000kmである。この南北での気候の差が大きい。これを実感してもらうには日本の代表的な花、桜の開花時期の違いを話すとうわかりやすい。小学校5年生の社会科教科書(教育出版、平成17年度検定版)の6頁には「桜はどこまでさいたかな?」というページがあり、日本地図に桜の開花時期を記入する作業を通じて日本列島の長さや季節の訪れの差を実感するページがある。これを参考にするとよいだろう。この頁には一都一道二府四十三県

都道府県庁所在地名	開花月日
北海道 札幌市	5 / 5
青森県 青森市	4 / 26
福島県 福島市	4 / 11
東京都 新宿区	3 / 28
新潟県 新潟市	4 / 11
静岡県 静岡市	3 / 28
長野県 長野市	4 / 14
大阪府 大阪市	3 / 30
京都府 京都市	3 / 31
島根県 松江市	4 / 3
広島県 広島市	3 / 29
愛媛県 松山市	3 / 28
高知県 高知市	3 / 23
福岡県 福岡市	3 / 26
鹿児島県 鹿児島市	3 / 26
沖縄県 那覇市	1 / 19

の都道府県庁所在地の開花時期の平均月日が資料として記載されているが、代表的な都市の開花時期のみあげると右表の通りである。単純に南から北へと桜前線が移

動しているのではないことがわかる。これは、海沿の地域や内陸の地域など、各都道府県の地理的な条件によって気候が異なるからである。

2) 日本の様々な地域

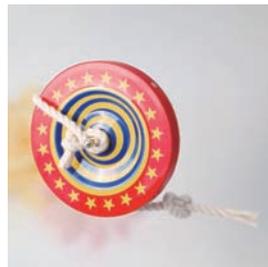
日本が南北に長い島国だとわかったところで、北は北海道から南は沖縄まで、日本の各地域の様々を知らせたい。開花時期のズレからおおよそのことは予想できるかもしれない。それぞれの地域の典型的な様子写真で示しながら、四季の違いや伝統行事などにもふれながら日本の様子を知らせたい。北海道であれば冬の寒さや雪のこと、東北地方の農業や祭りに代表される、大都市東京のビル街、新潟などの日本海側の地域の豪雪、中部地方の山地の様子、京都、奈良の寺などの世界遺産、高知県の漁業と四国地方の自然、佐賀県の吉野ヶ里遺跡と九州地方の農業など、紹介するところは様々ある。様々な土地の話をしながら日本の衣食住についてもふれておきたい。いずれも小学校五年生の社会科教科書が参考資料となるので、確認しながら準備をしておくといだろう。

(3) 私の生まれ育った地域

忘れてはいけないのが紹介をする自分の身近な地域のことである。それぞれの勤務校の子どもたちの生活を紹介しながら、日本の子どもの暮らしについて紹介したい。写真などを十分に用意して（映像などもあるといだろう）行いたいものである。可能であれば、赴任前に勤務校の子どもたちに、日本のことを紹介する新聞を作ってもらったり、手紙を書いてもらったりするとよりよいのではないか。同じ年頃の子どもたちのメッセージは、現地の子どもたちに身近に感じられることだろう。

4. よりよい授業にするために

話だけよりも、実際に手に触れたり、操作するものがあると日本がより身近なものに感じられる。子どもであれば食べ物や衣服、遊び道具などがあるともっと盛り上がる。食べ物は通関上の制限の問題もあるだろうが、浴衣や遊び道具であれば容易に持ち込める。遊び道具ではこま（含ベーゴマ）やメンコ、ビー玉、羽子板や竹とんぼカルタなど、日本の伝承遊びの小道具を少してよいから持ち込んではどうだろうか。あやとりなどはひもさえあれば、折り紙も紙があれば、現地でも準備できる。ただ、派遣される若い世代の先生方には伝承遊びとはあまり縁がなく育たれた方もいるだろう。以下、伝承遊びのおさらいのために参考になるホームページを紹介する。



- ・こま 日本独楽博物館 (<http://www.wa.commufa.jp/~koma/>)
- ・あやとり 国際あやとり協会 (<http://www.isfa-jp.org/>)
- ・凧 五十崎凧博物館 (<http://www.shikoku.ne.jp/bigkite/takohaku.html>)

板書とノートを効果的に使って 考える楽しさを味わう授業を

筑波大学附属小学校 細水 保宏

1. 授業の概要

単元名「数と図形の不思議」奇数の和を求める問題（第6学年）

本時は、右のような形に貼られたシールの枚数を求める問題を通して、多用な見方や考え方に触れながら、学習を活用したり、広げたりするよさや楽しさを味わせることをねらいとする。



子どもたちは、まず答えを出すことに必死になる。答えが出せたらそこで終わりにしないで、どのように出したかを問題にする。その際、自分の考えをノートに書かせるようにする。次に、みんなでその解き方を考える場を黒板の前でつくる。みんなの考えを持ち寄り、それぞれの考えについて話し合うのである。

つまり、問題解決型の学習で展開していき、算数の内容だけでなく、学び方も教えていくようにする。

2. 授業づくり 準備のポイント

本時の授業に必要なのは、とりあえずシールを貼った紙と、黒板と、ノートが必要である。と言っても、日本と授業自身の捉え方や環境が異なっている場合が多い。

例えば、「ノートに書く」という習慣がないことがある。書くより話す文化の国々では、ディベートは盛んであるが、ノートに考えを書くという習慣がない。ノートは黒板に書かれた中で、最低限のことを写したものになっていることが多い。すると、授業中机間巡視して子どもたちのノートを覗いたとしても、子どもの一人一人の様子がわからない。これではより一人一人の状態を的確に捉え、その状態に応じた授業ができない。

また、「黒板」の状況も考えなければならない。書く習慣の少ない国では、黒板の大きさも小さいことが多い。また、日本のように磁石がつく黒板はほとんどない。紙を黒板に貼りたいときなどは、テープを使わなければならない。これが思った以上に大変である。いちいちテープを切って貼っては授業のリズムも作りにくいからである。授業前に、短くテープを切って用意しておくとうい。また、のりのスプレーを用意して（インターネットで現地国でも用意できるので）使うのも効果的であった。

授業の展開の仕方も、授業の最初にあらかじめ子どもたちに話しておくことも必要である。算数は「問題の答えが出せれば終わり」「先生がやり方を教えてくれるのでそれを覚えればよい」「先生の言われたことだけやればよい」「間違えてはいけない」「質問したり、話したりしてはいけない」といった授業観の国では、日本で行われている問題解決型の学習を展開していきにくい。そこで、算数の内容だけでなく、学習の仕方も含めて授業していくことが大切である。

基本的には、算数の問題を提示し（問題提示）、それを自分で考え（自力解決）、出された考えをみんなで高め合い（共同思考）、まとめる（まとめ）という4つの段階で授業を構成していくことになる。そこで、例えば、本時の場合では、次のように最初に投げかけておくようにする。

「今から、シールが貼ってある一枚のカードを見せます。そのカードには何枚のシールが貼ってあるかを考える問題です。」と、「何枚あるかな？」と板書し、それを各自のノートに写させる。次に、「答えがわかったら、ノートにその答えを書いて、そして、どうしてその答えがわかったのか、その理由を書くようにします。準備いいですか？」「後で、みんながどのように考えたかを聞きますよ。」と、「学習の流れを投げかけておくと、子どもたちは先を見越して動くことができるようになる。

また、子どもたちが自分の考えを自由に言える環境があるかも捉えていかなければならない。そのような環境や習慣がないところでは、うまく取り上げないと子どもたちを逆に傷つけてしまう恐れがあるからである。

3. 授業づくり 実践のポイント

(1) 子どもが関わりたいと思える場を設定する。

まず、「もっとゆっくり見せて！」とつぶやきが挙がるような1つ1つ数えることができない状態で瞬間的に提示する。すると、その貼られた形で枚数を捉えていこうとする。その捉え方を大切にしたい。まず、一回、瞬間的に見せる。「シールが貼ってあったかな？」「何枚貼ってあったかな？」と問いかける。瞬間的で、しかも一回の提示では、総数は捉えられなくて当然である。そこで、瞬間的に見せることを3、4回繰り返し、その都度、「答えをノートに書いたかな？」「どうして全体の個数がわかったのかノートに書けたかな？」などと問いかけて、学習の仕方を身に付けることができるようにする。



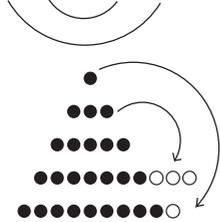
瞬間的に見せることを3、4回繰り返し、その都度、「答えをノートに書いたかな？」「どうして全体の個数がわかったのかノートに書けたかな？」などと問いかけて、学習の仕方を身に付けることができるようにする。

(2) 式と図とを結び付けて考える活動の場を設定する。

式と図とを結び付けて考えることにより、多様な見方や考え方の理解がより深められるとともに、数理的な処理のよさやおもしろさも感じとることができる。ここでは、式をよんだり、式を変形したりする活動を重視して、そのよさを感じ取らせたい。

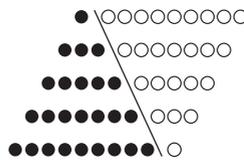
まず、オーソドックスな考えから取り上げる。最初は、図で説明しながらそれを式で表していく展開で行う。途中から、式を最初に取り上げ、その考え方を別な人が図で説明するという、式をよみとる場面を設定し、式に表したり、式をよんだりする力をつける。それぞれの解き方を式と図と結びつける楽しさが味わえるように展開する。

$$\textcircled{1} 1+3+5+7+9=25$$



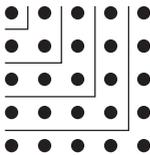
$$\textcircled{2} 1+3+5+7+9=25$$

$$\frac{9+7+5+3+1}{10} = \frac{25}{10} \quad (1+9) \times 5 \div 2$$



$$\textcircled{3} 1+3+5+7+9=25$$

$$5 \times 5 = 25$$



(3) 1つの問題をきっかけに新しい問題が生まれてくる展開にする。

5段の場合が解決できたら、「段の数が増えても枚数がわかるかな？」と投げかける。そして、「もし、10段だったら、シールが何枚ありますか？」と問いかけ、一般化を図るようにする。

$$\textcircled{1} 1+3+5+7+9+11+13+15+17+19=100$$

$$\textcircled{2} 1+3+5+7+9+11+13+15+17+19=100$$

$$+ 19+17+15+13+11+9+7+5+3+1=100$$

$$20+20+20+20+20+20+20+20+20+20=200$$

$$(1+19) \times 10 \div 2$$

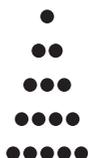
$$\textcircled{3} 10 \times 10 = 100$$

本時は、奇数の和を求める問題とも見ることができる。そこで、それをきっかけにし、整数の和や偶数の和を求めていこうとする気持ちを持たせていきたい。



「もし、次の図だったら、シールが何枚ありますか？」と問いかけ、それを解くことで、発展的に考える楽しさも味わわせる。

①整数の和



②偶数の和



奇数のときの考えを基にして、類推したり、新しい考えを発見したりして、発展的に考える楽しさを味わう。

4. よりよい授業には

外国で授業したり講演したりする機会に恵まれ、日本の授業について振り返って見てみると、今まで気づかなかった日本の授業の特色が見えてきた。

(1) 問題解決型の学習の普及

日本では、授業の型として1980年代からこの問題解決型の学習を取り入れた。算数の問題を提示し（問題提示）、それを自分で考え（自力解決）、出された考えをみんなで高め合い（共同思考）、まとめる（まとめ）という4つの段階で授業を構成していく。小学校では、一人の先生が、国語・社会・算数・理科・音楽・図工・家庭科・体育・道徳など沢山の教科を教えなくてはならないので、この1つのマニュアルができたことにより算数の授業がしやすくなったと言える。若い先生や算数を専門に研究していない先生でもある程度のレベルの授業ができるようになった。しかし、逆に型にとらわれすぎてしまう弊害も見られる。

(2) 教科書と指導書の活用

算数科の目的は、算数の内容の定着と数学的に考える力を育成することと言える。目標として学習指導要領に挙げられているが、その実現を目指して教科書が作られている。日本の子どもたちは教科書を使って勉強するのでどの子どもたちも最低基準となる学力を身につけることができているのである。

(3) 授業研究会

授業研究会は、よりよい授業を行うため、教師の授業する力を鍛えるために130年以上も前から日本で行われてきた研究方法である。また、これが文化にもなっている。どのような教材をどのように使うかといった教材研究の力、子どもたちの様子をどのように捉えていくかといった力、そしてどのように伸ばしていくかの指導力を鍛えていく方法をみんなで考えていくのである。授業研究は、授業した者もその授業を参観した者も確実に力がついてくる。

このような日本の教育のよさを、その国の文化に合わせて伝えていくことが大切であると考えている。

現地の子どもとのコミュニケーションを大切にする

筑波大学附属小学校 夏坂 哲志

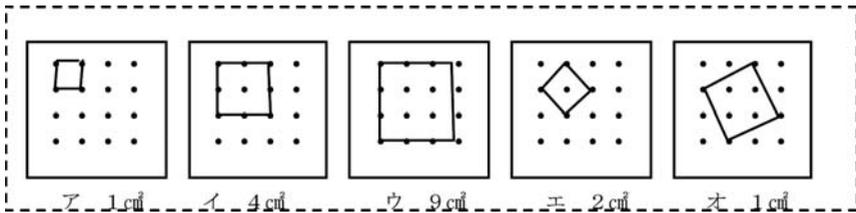
1. 授業の概要

(1) 教科および学年、題材名

算数科 第6学年「正方形の面積」

(2) 本授業の目的

縦横4個ずつ1cm間隔に並んだ格子点をつないで、正方形をつくる活動を行う。この点をつないでできる正方形は、全部で下の5種類。ア、イ、ウの正方形はすぐに見つけられるが、エとオがあることに気づく子は少ないと思われる。エとオを見つけたとしても、それぞれの四角形は本当に正方形と言えるのか、また、それぞれの面積は何 cm^2 か、ということの説明は難しい。



これらの説明をするときに、図形や面積に関する既習事項を振り返り、それらを上手に組み合わせて、自分の考えを聞き手に伝える必要が出てくる。このような一連の活動を通して、面積についての理解を深めるとともに、図形の観方を広げることができると考えた。

2. 授業づくり 準備のポイント

(1) 題材を決めるポイント①

- 授業で使うことのできる数や式の範囲、図形の種類を確かめる。
- 通訳が入る場合は、通常よりも時間が長くなることを念頭におく。

ここで紹介する実践例は、タイのバンコクで、現地の子どもを対象に、通訳を介して行ったものである。

私はタイ語が全くわからない。0から10までの数さえもなかなか覚えられない。そのような状態で、現地の子どもたちを相手にどんな授業ができるだろうかと頭を悩ませた。授業時間は50分と長めに設定された。けれども、授業をする私と子どもとの間に通訳が入ることを考えると、その半分程度の時間で終わる内容を考えなけ

ればならない。当然文字も書けないので、板書で示すことができるのは、数と式、図形ぐらいである。

そこで、簡単な図形と1から10ぐらいまでの数を使ってできる題材を考えた。その結果、選んだ題材は「正方形の面積」。これを考えることを通して、図形の観方を広げる授業をすることにした。

(2) 題材を決めるポイント②

○現地のカリキュラムを調べる。(教科書などを手がかりにする。)

授業の対象児童は6年生。そこで、まずは、タイの教科書を見て、タイでは6年生までに面積についてどんな学習をしているかを調べてみた。タイ語はわからないが、図と式を手がかりに解読すると、学年配当は次のようになっているようだ。

〔第4学年〕面積の意味、長方形や正方形の面積

〔第5学年〕正方形や長方形を組み合わせた図形の面積・三角形の面積

〔第6学年〕平行四辺形・台形・一般四角形(ひし形・たこ形を含む)の面積

これらの学習の発展として、本時の授業を設定することにした。

(3) 準備物について

○教室の環境やその国の文化について、事前にわかるとよい。

○日本のお土産も効果的。

日本ではどこの教室にでもあるものが、その国では使われていないということは珍しくない。これまでの私の経験では、次のようなことがある。

・黒板に磁石がつかない。そのために、数字カードなどを貼ったり移動させたりすることが簡単にできない。授業前に予め粘着テープを短く切ったものを黒板の周りに貼って用意しておき対処した。

・机が小さかったり、机の盤面が傾斜していたりすることもある。そのため、作業させたりゲームをしたりするのが難しい場合もある。

・紙が貴重な物であったり、学校に印刷機がなかったりする。だから、プリント類(掲示用・児童用)は必要な分印刷をして持っていくとよい。本実践の場合は、掲示用のドットと、子どもが直接かき込んで考えるためのプリントを用意した。

・おはじきなどの教具が、児童用も教師用も、日本と同じようにそろっているわけではないので、事前に確認をとるか、自分で持参するようにする。

・授業に「じゃんけん」を使ったゲームを取り入れようとしたが、「じゃんけん」があまり知られていなかったこともある。(教えるところから授業を始めた。)

・本実践では、子どもたちに日本からのお土産として千代紙を配り、それを授業の導入に使った。千代紙のような日本の物は、子どもにも喜ばれるし、それが授業の内容と結びつけば、導入もスムーズにできる。

3. 授業づくり 実践のポイント (授業の実際)

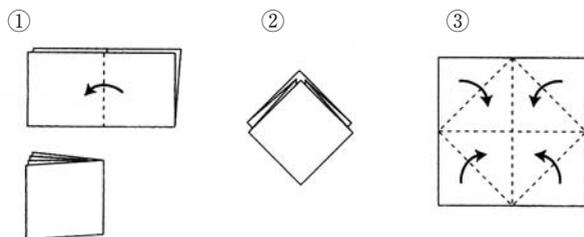
(1) 千代紙を折って小さな正方形をつくる

日本からのお土産に、千代紙を持っていった。意外と折り紙を知っている子どもも多かった。

「これを、折るだけで、もとの正方形よりも小さな正方形にするには、どんな折り方をすればよいか？」と問いかける。千代紙は正方形なので、この折り方が、正方形の面積を考えると時の手がかりとなると考えたわけである。

子どもと仲良くなるためのお土産が、授業に生かされるとよいと思う。

さて、子どもたちからは、下の3通りの折り方が出された。

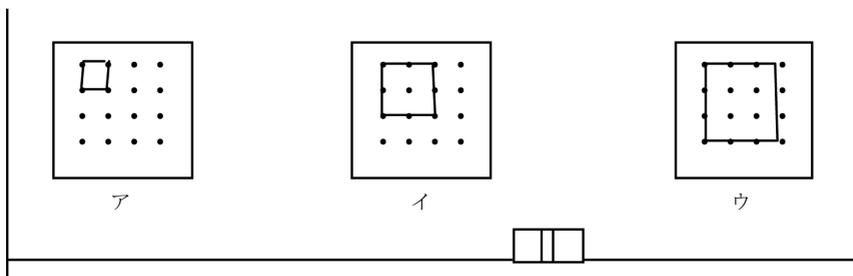


(2) いろいろな大きさの正方形をかこう

左の図を示して、「この点をつないで、どんな正方形がかけられるかな？」とたずねる。

最初に指名した子は、アの正方形をかいた。2番目の子は、別の点をつないで、全く同じ大きさの正方形をかいた。そこで、「違う大きさの正方形はかけないかな？」と問いかけ、考える時間を少し与えることにした。

子どもたちの間を回りながら、プリントにかいている図を見ると、イやウの正方形はほとんどの子がかいている。予想通り、エをかいている子は数人で、オは1人もいない。

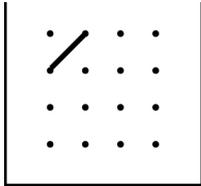


そこで、まずは、イとウの正方形を黒板の上の掲示用の紙にかいてもらい、それをホワイトボード上に左から小さい順に並べて貼った。

言葉は通じなくても、図や数、式はコミュニケーションの道具として使うことができる。黒板（ホワイトボード）やカードを上手に活用することによって、問題を把握させたり、考えを交流させたりすることが可能になる。

(3) 他にもあるよ

ここで、「他にもあるよ」と手を挙げる子がいるが、多くの子はエやオの正方形があることにまだ気づいていない。そこで、プリントにエの正方形をかいている子を指名し、ホワイトボード上のドット図に、正方形の1つの辺だけをかくように指示した。それが、エの正方形に気づかせるためのヒントになる。指名された子は、左図のように直線を1本引いた。



これを見て、「わかった!」という子が増えてくる。ここで、エの正方形を完成させることにする。

この後、エの正方形を、ホワイトボード上のどの位置に貼ればよいかを考えさせるために、「先生が、これからこの正方形（エ）を、（ホワイトボード上を）左の方から移動させていきます。貼ればよいと思う位置で『ストップ』をかけてください」と指示をした。目的は、エの正方形の大きさをア〜ウと比べさせ、面積は何 cm^2 になるかを考えさせることである。

子どもたちは、アとイの間で「ストップ」をかけた。根拠として、「面積が 2cm^2 だから」と答える。そして、その理由を様々な方法で説明していった。

さらに、オの正方形を見つけ、それが 5cm^2 であることの説明までをして、授業を終えた。

4. よりよい授業にするために

海外では、通訳を介して授業を行うことが多い。そのときに気をつけなければならないことがいくつかある。例えば、次のようなことである。これらについて、事前に通訳者と打ち合わせをしておく方がよい。

- ・通訳者の意識が入らないようにする。特に、子どもの発した言葉はそのまま日本語に訳してもらうことが大切である。そうしなければ、授業者は、子どもが理解していると勘違いして授業を進めてしまうことになるからである。

- ・授業者が、子どもの手の挙げ方とかノートのとり方などを褒めても、通訳者が学習内容に関係が無いと判断すれば、訳さない場合がある。けれども、授業をする上でとても大切なことなので、褒め言葉もきちんと訳してもらう。

短期滞在の場合、現地の言葉で授業をするのは難しいことであるが、数や形の名前、位置（前後左右上下など）を表す単語、子どもの動きを指示する言葉（「立ちなさい」「すわりなさい」「手を挙げてください」「ちょっと待って」など）は使える方がよい。また、褒め言葉（「素晴らしい」「いい考えだね」など）もいくつか覚えておくと、すぐに自分の言葉で褒めることができるとよい。

計算の性質を活用する計算の工夫

筑波大学附属小学校 盛山 隆雄

1. 授業の概要

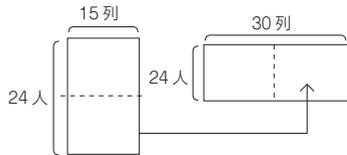
教科領域：算数科 数と計算領域

対象学年：4年生（2桁×2桁の計算に習熟後）

本授業では、かけ算の性質を問題にする。 $24 \times 15 = 12 \times \square$ の \square に当てはまる数を求めさせる。

積が一定の場合、かけられる数を2倍、3倍…（ $1/2$ 、 $1/3$ …）にすれば、かける数は $1/2$ 、 $1/3$ …（2倍、3倍…）になる。前半は \square を求めることを通して、この性質に気づかせる。そして、後半はこの性質を活用することで、積が等しいかけ算の式づくりをする。かけ算の性質を活用することができれば、積が等しいかけ算の式を多く作ることができるだろう。それは、かけ算の性質を活用するよさを感じ得ることになる。

問題を出題するにあたっては、日常的な場面（文脈）想定する。それは、大きなホールで、子どもが1列に24人ずつ15列のいすに座って演劇を観るという場面である。ところが次の年に観にいったときには、同じ人数の子どもが1列12人ずつ座ることになった。さて、何列分のいすを使うのかという問題である。（右図参照）



2. 授業づくり —準備のポイント—

この授業を作る上で必要なものはアレイ図である。●が縦1列に24個で横に15列並んだ図を用意する。授業では、その●を人に見立てるのである。黒板提示用の図とできれば子ども一人ひとりの手元にも図を用意する。

黒板提示用の図は、模造紙に手書きでかいたり、シールを360個貼ったりして準備する。もちろん、A1程度の大きさの紙に印刷できるプリンターやコピー機があれば楽である。現地で調達するのは難しいので、日本で用意したほうがよいだろう。

黒板提示用の図は、上の図のように切って形を変えて貼ることになるので、はさみが必要である。また、海外の黒板またはホワイトボードは磁石がつかないことが多いので、セロハンテープがあると便利である。子ども一人ひとりに渡すB5程度のプリントの原版は日本で作っておき、現地で印刷すればよい。

3. 授業づくり —実践のポイント—

$24 \times 15 = 12 \times \square$ という式を黒板に書き、「 \square はいくつでしょう。」と問いかける。

2桁 \times 2桁の計算ができる子どもは、 $24 \times 15 = 360$ と計算し、 $12 \times \square = 360$ となる \square を考えようとするだろう。もしも \div 2桁の計算を学習していれば、 $360 \div 12 = 30$ と答えを導くことができる。また、 \div 2桁のわり算を学習していなくても、 $12 \times \square = 360$ の \square に適当に数を当てはめて試行錯誤しながら \square の数を求めることが出来るかもしれない。

そのような子どもの様子をしばらく観察してから、図を提示して場面を説明する。この段階では、まだ子どもに発表はさせない。

右のような図（アレイ図）を提示して、次のような説明をする。

この式は、次のような場面の問題からできました。ある学校の子どもが大きなホールに劇を見に行きました。1列に24人ずつ座ったら15列でちょうど全員座れました。

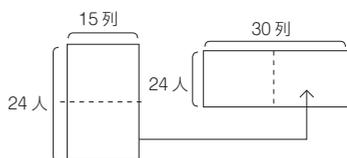
次に見に行ったら、同じ人数の子どもが1列に12人ずつ座ることになりました。

全員座ると、何列になるでしょう。



※その国の状況に合うようにこの場面は修正する。

場面を説明したら、改めて \square に当てはまる数を問う。このときに、子どもから図を操作すればよいというような意見が出れば取り上げる。図を操作するとは、右のように最初の図を半分につなげることである。



1列を12人にするわけだから、半分につなげてそれを列の後ろにつける。15列の2倍で30列になることが理解できよう。

仮に図を操作するアイデアが出なくても、「1列に12人になるということは、この図がどうなるということかな、図で考えてみよう」と投げかけ、図で考える展開にする。

そのほかに計算や試行錯誤で求めた子どもがいたら発表させる。図で30列ということは確かめられているので、正しいか正しくないかは、図を根拠に判断することができる。

答えが30列と出たら、 \square にあてはめて式を完成させる。

$24 \times 15 = 12 \times 30$ となる。このときに何か気づいたことがないか問う。かけられる数が $24 \rightarrow 12$ と半分になって、かける数が $15 \rightarrow 30$ と2倍になっている関係を見出させたい。

次に、もしも1列に6人ずつだったら何列になるかを考えさせたい。

$$\div 2 \quad \begin{array}{l} 24 \times 15 \\ 12 \times 30 \end{array} \quad \times 2$$

このとき、子どもは、1列12人のときのように図をまた切って操作しようとする。また、式の関係から考える子どももいるだろう。

式の関係で考察する前に、図の操作で確かめておくことが大切である。式の関係から考える場合の根拠となるからである。

1列が6人の場合は、1列12人の図をさらに半分に切って列の後ろにつけるので、60列となり図がさらに長くなる。

右の写真の一番左の図が1列24人のアレイ図で、真ん中が1列12人、右側が1列6人のアレイ図である。



1列の人数が半分になり、列が2倍になる関係を図からイメージし、理解させていきたい。

同時に、写真の右側に子どもが手をかざしているカードがある。カードに式を書いて順に並べていくことで、式のかけられる数とかける数の関係が見やすくする。

かけられる数を $\div 2$ にして、かける数を $\times 2$ にする。そうすれば、積が同じ異なる式ができる。なぜそうなるかは、図で説明ができるだろう。

ここまでくると、子どもから「もっとほかにもできる！」という声があがる。 $\div 2$ 、 $\times 2$ の方法を使うと、 6×60 から 3×120 ができるのである。この段階では、もう図で示すことは必要ない。

しかし、 3×120 から先は困ったことがおきる。 $\div 2$ 、 $\times 2$ が使えないのである。 $3 \div 2$ は割り切れない。授業者はこの場面を想定しておき、 $\div 2$ 、 $\times 2$ という数でなくて、例えば $\div 3$ 、 $\times 3$ という操作でも異なる式ができるということを理解させる場面にしたい。

3×120 に、 $\div 3$ 、 $\times 3$ という操作を加えると、 1×360 という式を作ることができる。つまり、一方をある数で割り、もう一方の数に割った数と同じ数でかけると、積が同じ異なる式ができるということを押さえるのである。ただこの時、劇場の座席の場面に立ち返り、1列に1人ずつ360列に座るということが現実的でない

24×15
12×30
6×60

という指摘が子どもから出るかもしれない。それは、子どもが式を具体的な場面によんだということの意味しているので、むしろそのような指摘は歓迎すべき子どもの姿といえる。

さらに、 24×15 の24に $\times 3$ 、15に $\div 3$ という操作をすると、 72×5 という式ができる。このような展開でかけ算の性質を活用した、積が等しいかけ算の式作りを進めていく。

4. よりよい授業にするためには

(1) 計算の工夫のために

かけ算の性質を利用した式づくりは、本来は目的を持って行うことが大切である。それは、計算を簡単にするという目的である。

例えば、授業で扱った 24×5 という計算を工夫して行いたいというとき、かけ算の性質を使ってどんな式に変形すればいいのか。

授業では、 12×30 、 6×60 、 3×120 と式変形していった。この3つの式で考えれば、 6×60 は暗算で計算できる。このように、かけられる数またはかける数を、何十とか何百という数にすることができれば計算を簡単にするのできる。これを計算の工夫とする。

15×18 ならばどうだろうか。かけられる数に $\times 2$ をして、かける数を $\div 2$ にすれば、 30×9 となる。これは暗算で270と答えを導くことができる。かけられる数に $\times 6$ をして、かける数に $\div 6$ をすると、 90×3 となる。この計算も暗算で答えを導くことができる。

このような計算の工夫は、かけ算の性質を使うと同時に、数に対する感覚を育てることにもなる。それは、 15×18 の式を考察する場合でいえば、15にいくつをかければ何十というきりのいい数を作ることができるか、18をいくつで割れば割り切れるかということを瞬時に判断する感覚ともいえる。

計算の工夫には、例えば右のようなものもある。

この計算の仕方は、12を 4×3 と見る見方を生かしている。12を乗法的な見方で 4×3 と見て、 $25 \times 4 = 100$ という特殊な計算を利用している。

25×12 の計算は、計算の性質を活用しても 100×3 と式変形することができるので、両方の方法とも結局 100×3 という何百という数を作って計算する方法として統合的に見ることでもできる。

$$\begin{aligned} 25 \times 12 &= 25 \times 4 \times 3 \\ &= 100 \times 3 \\ &= 300 \end{aligned}$$

このように、かけ算の性質を生かしたり、数の柔軟な見方を生かしたりして、計算の工夫をすることで、それらを活用するよさを感じさせることが大切である。

そうすれば、先生がやりなさいと指示しなくても、子ども自ら計算に働きかけ、工夫して計算するようになるであろう。

現地の植物を使って、観察力を 育てる授業を

筑波大学附属小学校 佐々木 昭弘

現地での理科の実践を豊かなものとするために、授業づくりのヒントを紹介するのが本稿の使命なのだが、筆者には海外での授業経験がない。海外視察程度の乏しい経験をもとに、考えられる授業プランを考えてみる。

1. 授業の概要

知っているようで知らないことは、意外にあるものだ。

毎年子どもたちが当たり前のように目にしているチューリップのような植物がある。そのような植物を、何も見ないで絵にかいてもらうのだ。すると、簡単だと考えていた子ども、実際に絵に正確にかくことがいかに難しいことかを実感する。そして、絵をかくためには、葉の形や模様、葉の並び方やつき方、花びらの形や数といった、かなりこまかい植物の体のつくりについての知識が必要だということを実感する。

植木鉢に植物の種をまいて、発芽して双葉が出て、そして本葉が出てすすくと成長していく……というのは、当たり前の話だが、ここで子どもたちには内緒で他の植物の種をまくのだ。2種類の植物を比較しながら、子どもたちは様々な類似点や差異点を見出す。

ここで紹介する授業は、植物を観察する時の観点を子どもたちから引き出すことを目的としており、「理科」を想定している。しかし、生活科・総合のような教科・領域でも実践できる。対象学年も、若干の創意工夫は必要だろうが、1年生から6年生まで実践可能である。

2. 授業づくり 準備のポイント

(1) 教材開発

日本の教材としてポピュラーなアサガオやヒマワリの種子を、日本から持ち込むことはまずできないだろう。だから、生物教材を現地で調達しなければならない。

もし、種子が準備できなければ、市場で手にはいるような一般的な野菜、果物などを教材として代用することもできる。また、農業が盛んな地域ならば、家庭で育てている農作物を使って、意外にも自分たちはその植物のことについて知らないという事実を示すことはできる。それによって、学習のインパクトを高めることもできるだろう。

決して珍しい教材を準備する必要はない。子どもたちが普段目にしていてのものの中から教材として取り上げ、よくよく観察してみたら、いろいろなことが分かったという実感を持たせることが大切なのだ。

(2) 観察と言葉

理科教育を「言葉」の視点で表現すると、「観察・実験を通して得られた情報（データ）をもとに、科学的知識・科学的理論を活用して、自然の事物現象を言語化できるようにする学習」と言えるかもしれない。

つまり、学びの集団が共有できる科学的知識や科学的理論を使って言語化しなければ、子どもの自然事象に対する認識は、独りよがりのものにすぎず、だれとも共有することはできない。つまり、科学的というための条件である「客観性」が保障されないのだ。

では、単に言葉を使って表現すればよいかというと、そうではない。言葉というものは、概念を形成する上で重要な役割を担っている。極端な表現を言うと、言葉がなければ概念は形成されない部分があるのだ。

例えば、アラスカ先住民には、雪の白さを表す言葉がたくさんあり、見事にその色の違いを見分けるようだ。ところが、その言葉をもたない言語圏の人々にとっては、雪の白さの微妙な違いを認識することはできない。つまり、言葉の存在によって人の認識が左右され、その認識の積み重ねによって概念が形成されるという考えも成り立つのだ。

そう考えると、観察している事実というものは、その文化圏に生活している子どもたちと、他の文化圏で生活してきた教師との間ではかなり違う認識の壁が存在しているかもしれないということだ。まして、通訳を介しての授業となると、その影響ははかりしれないだろう。

だから、授業において観察・実験を行う場合に注意しなければならないことは、「どうということからそういえるの?」といった、子どもが使った言葉と、観察・実験で得られた事実との照合を促す問いかけをすることである。この問いかけによって、子どもは自分の言葉の意味を事実と結びつけながら表現してくれるはずだ。その表現に、わたしたち異なった文化圏に生きてきた教師でも子どもの認識を理解できる糸口があると思われる。

3. 授業づくり 実践のポイント

(1) ○○って知ってる?

学校や地域周辺に、教材となる植物の花がたくさん咲いたころ、子どもたちに、「○○って、知っていますか?」と問いかける。すると、その植物が普段当たり前のように目にしているものならば、どの子も自信をもって「知っている!」と答えるだろう。

そこで、次のように話す。

今、あちこちには〇〇の花がたくさん咲いています。あなたたちは、今日も見ただけです。(子どもたちはうなづく。)

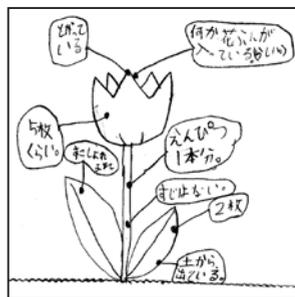
では、〇〇の絵をかいてもらいましょう。土から上の目に見える部分の〇〇を全部かくのですよ。

ここからは、チューリップを教材にした指導例を紹介する。

「簡単だ!」と豪語していた子どもたちも、実際にかき始めると、なかなか難しいことに気付く。悪戦苦闘して何とかかき上げたものの、自信はない。

とりえずノートにかき上げた子から、黒板に同じ絵をかいてもらうのだが、一つとして同じものはない。世にも不思議な〇〇が黒板に咲き乱れることになる。

さて、子どもたちはどんなチューリップの絵をかくのかというと、例えば下図のような感じになる。1年生でも、下の図のような絵ぐらいはかけるはずである。黒板にかかれた、たくさんの不思議なチューリップを目の前にした子どもたちは、教師が何も言わなくてもチューリップを比較し始める。ここで、「自分の絵と友達の絵を比べると、どんな違いがありますか?」ときけば、様々な違いが子どもたちから発表されるはずだ。そして、以下のような観察の視点が明確になっていく。



花→花びらは何枚か?

- ・どんな形をしているか? (先はとがっているか、丸まってるか?)
- ・花びらの中には何が入っているか?

葉→葉は何枚ついているか?

- ・どんな形をしているか?
- ・すじ(葉脈)はあるのか? (あるとすればどんなすじか?)
- ・葉は茎のどこから出ているか?

茎→太さはどのくらいか?

- ・長さはどのくらいか?
- ・傾いている? 曲がっている?

ここまでくると、子どもたちは本物のチューリップが見たくてたまらなくなってくる。そして、外に飛び出した子どもたちは、本当に意欲的に観察する。自分がかいた絵と本物の違いに驚き、今まで見えなかったことが見えるという実感を味わうのである。

最後に、子どもたちにこんな話をする。

知っているはずのチューリップでも、こんなに知らないことがあったのです。いえ、チューリップだけではありません。「分かったつもり」になっていて、本当はわかっていないことはたくさんあるのです。

この経験をした子どもたちは、「そんなの知っている！」とは、簡単に口にしなくなる。

海外であっても、その土地その土地でなじみの植物（花）はあるはずだ。是非、教材になる植物を捜してみしてほしい。

(2) いろんな種をまいてしまえ！

単に子どもたちに植物を育てさせただけでは、観察力を鍛えることはなかなかできない。そこで、ちょっとずるい(?) こんな工夫はどうだろうか。

主に観察させたい種まきをした日、子どもたちが帰った放課後に、子どもたちの植木鉢に別な植物の種をまいてしまうのだ。先にまいた植物よりも早く発芽する種類を選ぶことがポイントである。

まず、子どもたちが知らない植物が発芽する。次に、子どもたちがまいた植物の芽が出る。そして、どちらも双葉や本葉を出すのだが、形や色がまったくちがうのだ。ここから、子どもは比較をし始める。教師が何も言わなくても、双葉の形、色、大きさ……そして、教科書や図鑑で調べ、その違いについての情報を、子ども同士で交換するのだ。

子どもの発見は、比較から始まります。子どもたちが自然に比較するような場づくりによって、子どもたちの観察の目は育っていく。

4. よりよい授業にするために

公立学勤務校時代に、1年生のベランダにあったアサガオの鉢に支柱が一斉に取り付けられていたことを、何度となく見てきた。

ところが、ときどきではあったが、一斉にはなく、少しずつ、アサガオの成長に合わせて支柱を立てていく学級もあった。その時の支柱は、棒の長さも、数も、種類も、子どもによってまちまちであった。

子どもの「思い」を大切にすると、こういうことなのだと思う。植木鉢に種をまこうと考えれば、どんな土を入れたらいいかが問題となる。土を入れた後は、それをどこに置いたらいいかが問題となります。その時の子どもたちの考えには、科学的なものの見方や考え方の素地が潜んでいるのだ。

子どもがいったいどんな問題を見つけるか、そして、その問題をどう解決したいのか、どう解決できるのか……子どもと一っしょに考えることに喜びを教師が感じる事ができれば、言葉や文化の壁を越えて、科学の芽を育てることができるかもしれない。

子どもの「三種の神器」で「造形遊び」を —水・棒・土を使って—

筑波大学附属小学校 林 耕史

1. 授業の概要「造形遊び」をスタートラインに

人気教科のアンケートなどがあると、必ず図画工作は体育などと並んでトップにランキングされる。絵を描いたり工作をしたりと、造形の楽しさを日本の子どもたちは毎週感得しているわけだ。しかし、これは国際的に眺めたときには当たり前のことではない。諸外国には造形を通じた教育を学校における教科として設定していない国もある。国際教育協力などで援助を必要としている国の多くは、造形にかかわる学習活動が学校では行われず、専ら、母国語および計算などの「読み・書き・そろばん」を学習させているのが現状であるようだ。

このような状況ではあるが、造形教育は、次代を担う豊かな人間性をもった子どもたちを育てるうえで重要であることには変わりはない。現地の教育課程に造形教育が位置づけられていなくとも、是非、子どもたちと共に造形活動を楽しみ、造形を通じた教育をして欲しいと願う。とはいえ、任地に赴いたときに、いきなり日本で広く行われているような「絵に表す」活動や「鑑賞」などを展開しようとしても、材料や環境の点から困難があるだろう。というのも、クレヨンや絵の具ばかりでなく、紙の準備も十分とは言えないような国や地域があるからだ。

そこで、ここでは現地の材料や環境を生かした「造形遊び」的な考え方で設定する題材を通して、造形活動の楽しさへ導いていくスタイルを提案したい。「造形遊び」は日本の小学校図画工作科（次期学習指導要領では中学校にも拡大される）を特徴づける領域である。即ち、材料や環境を生かしてどんなことができるだろうかと発想し、様々な工夫をしながら活動していくというものである。何気ない行為の中に、発想や構想の能力が発揮され、創造的な技能が培われていくのである。そして、その活動の多くは、個人で終わるといよりも一緒に活動する友だちとつながり、共に創り上げていく「共創」の姿へと発展していく。これらの活動は、国が違っても、どの子どもたちにも必要な大切な力を育てるであろう。現地で可能な、現地ならではの造形教育は、「造形遊び」からスタートさせるとよいだろう。

2. 授業づくり 準備のポイント～子どもの「三種の神器」を使って～

子どもたちは遊びの天才である。ちょっとした空間と時間があり、そこで手のできるような材料があればすぐに遊びを考え出す。このような子どもたちをすぐに魅了するものに、水と棒、そして土がある。これらは、たいがいの国や地域で手に入るものであり、現地のロケーションを生かせばダイナミックな活動ができるだろう。

もともと、水はかなり貴重な地域もあるから、気軽に使えないところもあるかも知れない。それでも、棒や土があれば、つまり、一番素朴な環境さえあれば、そこに造形的な活動が生まれる。

(1) 水を使って

水道などが無い地域もあるから気軽に使えない場合があるが、海や川など水辺で水が豊かにあるようなところであるなら、水は大いに使いたい材料である。

① 地面にまいて

ジョロや空き缶、ペットボトルなどに水を入れて乾いた地面にまく。ただこれだけで、子どもたちは大騒ぎになる。ジョロなら大量の水を入れられる。シャワーノズルをつければ水が細かい点を描いていく。振り回せば自分を中心にして大きな円弧が描ける。庭があれば水をまきながら走りたくなるだろう。そのうちに、



●水の跡からいろいろな発想が生まれる

友だちのまいた水の跡と自分のまいた跡が交差したり重なったりする。「もっと、こうしよう」

「じゃあ、あんなようにしよう」など、友だちとのコラボレーションがすぐに始まるだろう。

空き缶やペットボトルも楽しい。缶に穴などあっていたら、ポタポタとしたたり落ちる水を見ているだけで、子どもたちは「次はどんなことをしようか」と考える。水を使って自分の痕跡を残していくことができるのは楽しい。そして、乾けば消えるし、どンドンやり直しができるという点も魅力だ。



●子どもたちは水・棒・土が大好き

② 砂や土をドロドロにしたり流したりして

砂浜やちょっとした地面があったら、そこに水をためたり流したりすると、子どもたちは、たちまち地球と格闘するような造成工事を思わせる造形活動を始める。ドロドロの土に触れることで全身を使った豊かな造形遊びとなる。

①もふくめ、これらは子どもたちが当たり前のように見せる姿だろう。しかし、学校という場に集まり友だちと一緒に活動することから生まれる共創の姿は、教育を普及、定着させるための大切な基盤となるはずである。そして、これらの活動を通し、そのほかの教科に発展していくようなヒントを得ることができるだろう。

尚、この他、「色水をつくる」「何か水に浮かべる」など、展開が可能である。

(2) 棒を使って

男の子は例外なく棒が大好きである。女の子だってそうなのかも知れない。棒を持たせると、所謂チャンバラごっこを始めるが、そのうち「棒で描く」「組んで形

をつくる」という姿を見せる。

①地面をひっかいて

広い土地に、自分の痕跡を残して大きな絵を描くということは快感だ。子どもたちが何人も寄り集まって描いている様子を見ると、夢中になっている。そこでは言葉が行き交い、新しい空想の世界を創り出しているかのようだ。

②棒を地面に刺したり組んだりして

棒や板は、子どもたちには家をつく

る材料にも見える。柔らかい地面があれば、棒を次々にさして「陣地」をつくったり、棒を組んだり板をのせることで「家」をつくったりする。自然発生的にこのような活動になるが、材料が豊富にあるような環境であれば、教師から「みんなで一緒に暮らせるような家をつくろう！」と提案してみよう。子どもたちは大喜びだろう。活動のなかでは、年上の子がリードして年下の子を支える姿を見せるなど、共同体としての意識も育つだろう。

③ひもで組んだりナイフで削ったりして

他の材料と組み合わせたり道具で加工したりすると、棒を使った造形活動も幅広くなる。ひもや針金、釘などを使用できるのであれば、②で述べたような活動はさらに豊かになっていく。また、棒や角材などが入手でき、小刀のようなナイフなどの道具があれば、削る、彫るなど「ものづくり」としての活動も展開できるだろう。民芸品のように、現地に伝わる造形作品をつくるような授業を導入するのも、任地に密着した教育のあり方として歓迎されることだろう。ただし、刃物などの道具の扱いについては、十分安全に留意する必要がある。

(3) 土を使って

地上である限り、足元の地面はどこにでも存在する。しかしその有り様は千差万別。しっとりとして湿っているところがあるかと思えば、乾燥地区は硬かったり砂状になっていたりする。また、戦禍の跡が残るところでは、がれき混じりの荒れ果てたところもあるだろう。それでも子どもたちにとって、自分が自らの足で立つ自分たちの土地であることには間違いはない。

①穴を掘って

小さなシャベル（スコップ）でもあれば、子どもたちと一緒に外に出て「穴」を掘って楽しんでみよう。ただ穴を掘ると言っても、子どもたちは様々な姿を見せてくれる。穴を点々と掘って、自分の痕跡をつけていくこと



●地面が楽しく大きな画用紙になる



●穴を掘りだすと次々にやりたいことが浮かんでくる

で、次第に対象（土）にかかわる主体的な姿勢が鮮明になっていく。穴を掘ると、そこに何かを「埋める」「かくす」「立てる」「流しこむ」など、そこから次の行為へと発展していく。

②土をこねたりドロドロにしたりして

場所によっては、粘土質であったり泥状の土になっている場合もあるだろう。そんなときは、その場所で、粘土遊びをしたり泥でフィンガーペインティングをしたりということが可能である。前述のように、水を使ってみるのもよいだろう。造形遊び的な展開で、「この土でどんなことができるだろうか」と問いを投げかけ、子どもたちとともに様々なやり方を考えていくのである。作品化をめざすと言うことではなく、行為のなかに見られる造形の姿を大切にしたい。土や泥で盛り上げながら、思いもかけないオブジェが誕生するかも知れない。勿論、焼きものにできるような土があるのなら、焼成するのも楽しい活動である。土器をつくるように野焼きができれば面白い。

③石、岩、がれきなどで

土は、そこに手を加えて形を変えることできる。しかし石や岩は難しい。そんなとき、石を並べる・積むという行為は、面白い造形活動になっていく。石を並べて模様にしたリナスカの地上絵のように、大きな絵にしていくこともできる。また、石を積んで様々な形をつくりだすこともできるだろう。くずれた煉瓦やブロック、コンクリートのがれきなどでも同様である。単純な行為ではあるが、それ故に様々な形態を工夫できることが楽しさを生む。

3. 授業づくり 実践のポイント～現地調達の手当が一番！～

ここでは、「三種の神器」と銘打って、水・棒・土を代表材料にしたが、その他の物でも造形遊びは勿論できる。安全性に配慮する必要はあるが、現地でも多く調達できる物や廃材などで楽しい活動ができる。財政的に恵まれている地域・学校ばかりではないので、学校周辺で無料で手に入る材料は大切な教材になる。教師の工夫次第で様々な活動ができるだろう。大切なのは「何をつくるか」ではなく、「どんなことができるか」である。まず、作品作りをめざすような活動ではなく、子どもたちの創意や工夫を発揮できる活動をこそ、子どもたちに提供して欲しい。造形遊び的な題材は、それに一番ふさわしい。そして、現地調達の材料が一番である。

現地に赴任したら、子どもたちと一緒に歩き、遊ぶ中から造形活動に使えそうな材料を探そう。子どもたちに、現地ならではのものを紹介してもらったり、様々な使い方を教わったりすることもあるかも知れない。こうしたコンタクトやコミュニケーションを通して、現地の人々と心を通わせ、その土地に根付いた教育活動ができるようになる。

「図画工作科」のような造形活動を通じた教育は、子どもたちの心と教師の心をつなぐ、優しく温かな絆をも創ってくれることだろう。

日本の着物文化を伝える —「包んで楽しむ」—

筑波大学附属小学校 勝田 映子

1. 授業の概要

家庭科「快適な衣・住生活」領域の学習。対象学年は、5・6年生どちらでも可。3時間扱いである。

授業はまず、日本の「風呂敷」を使って、さまざまな物を包むことから始める。初めに子ども達に自由に物を包んでもらい、現地の生活文化を子どもから学ぶ。その後、日本で伝承されている包み方を披露し、子どもと一緒に包み方を楽しむ。

次に、身体を包むにはどうしたらよいかを、風呂敷で「頭を包む」例で試させる。ここでも現地の生活文化を子どもから学び、日本のそれと交流する。さらに、帽子をかぶらせ、布で頭を包むこととの違い、布で包む長所、短所を発表させる。

最後に、身体（立体）を布（平面）で包む衣服として日本の「着物」を紹介し、型紙（P.49に貼付）に模様を書かせ、鋏で切って着物を作らせて、気付いたことを発表させる。最後に、日本では布は貴重品だったので、着古した着物はほどいて他の用途に繰り返し使ったことや、風呂敷が見直されているなども伝えるとよい。

2. 授業づくり 準備のポイント

<用意する物>

①風呂敷・・・次の三種類用意すると良い

- 50cm（尺三幅）角・・・バンダナ、お弁当包みでも可。
- 68cm（二幅）角・・・最も一般的な大きさ。
- 90cm（二四幅）角・・・一升瓶二本を包むのに適している。

* 素材は、綿 100%のものより化学繊維のものの方が、扱いやすい。

* 児童用には、68cm角のものを人数分または、班の数分用意するとよい。

無理な場合は、50cm角のバンダナでもよい。

②帽子

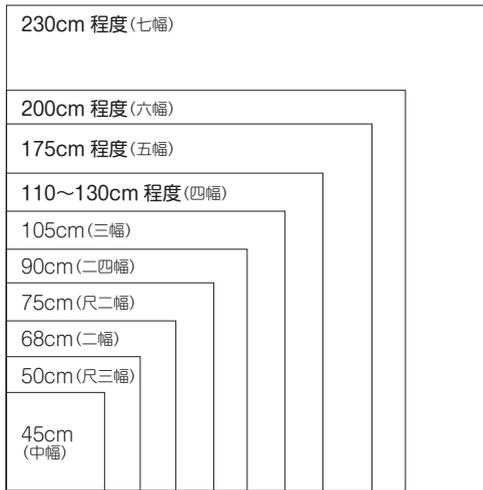
③着物の型紙（後ろに貼付。）

④着物（ゆかたなど）と帯の現物または写真

* 着物と帯が手に入ったら、鏡を用意して着たところを見せたり、写真に撮ってあげるとよい。

< 現地での準備について >

風呂敷は、用途に応じてサイズが決まっており、全部で 10 種類ある。

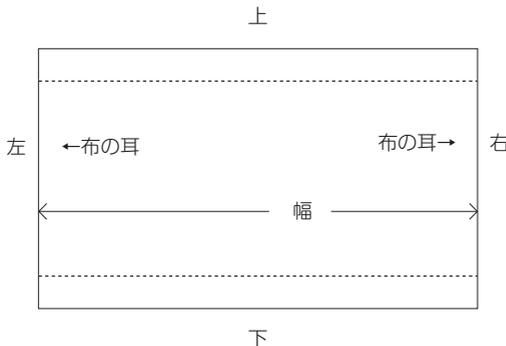


- ・・・ 布団の収納・引っ越し等を使う。
- ・・・ 布団ひと組分の収納等を使う。
- ・・・ 座布団 5 枚、こたつの上掛け等に使う。
- ・・・ 大きめの荷造りに使う。
- 一升瓶なら二本が包める。
 - よく使う大きさ。
 - 最もよく使う大きさ。
 - 一升瓶一本が包める大きさ。
- ・・・ お弁当箱を包む大きさ。
- ・・・ のし袋を包むのに使う。

日本から現物を送ってもらうのが一番だが、90cm幅や 105cm幅は、布の標準的な幅と同じなので、現地で布が手に入れば、自分で作ることもできる。

その場合は、布の耳はそのまま残し、上下を縫う。その際、横幅を縦（布の耳の辺）よりも 2cm くらい長くして作ると良い。

風呂敷は、実は正方形ではない。横幅が少し長い。一方が長いことで、斜めに引き合う力が生まれ、伸縮作用が働いて使いやすくなるようにできている。



子どもひとり一人に結び方を体験させたい時は、50cm角のバンダナなら、100円ショップで比較的安価に用意できる。

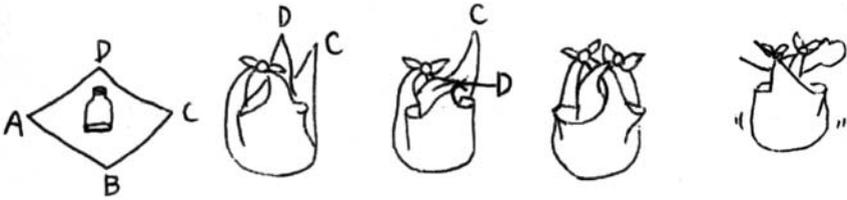
着物については、やはり現物が一番。ゆかたなど子ども用のものを用意し、着せてあげるとよい。その際は、鏡を用意して見せたり、写真に撮ってあげたい。

3. 授業づくり 実践のポイント～よりよい授業づくりのために

風呂敷で物を包ませる時には、初めはティッシュ等の箱、次に教科書数冊。その後「こんなものは、どうする？」と言ってボール、ペットボトル二本というように下記を参考に、包みやすい物から包みにくい物へと活動を進めるとよい。

ここではよく知られた包み等については省き、簡単な巻き包み等を紹介する。

【お使い包み】



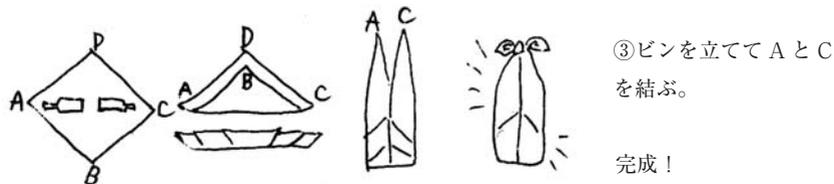
- ①物を風呂敷の中央に置く。 ②AとBを結ぶ ③できた輪をDにくぐらせてCとDを結ぶ。 完成！

【スイカ包み】



- ①スイカを中央に置く。 ②四隅を持ち上げる。 ③B,Dを持ち上げた状態ではAとCを結ぶ。 ④BとDを結ぶ。 完成！

【ピン包み】



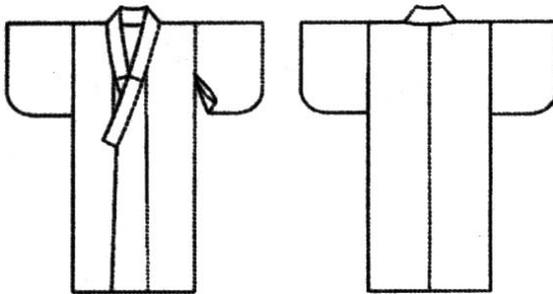
- ①日本のピンを10cm間をあけて置く。 ②Bをかぶせて巻く。 ③ピンを立ててAとCを結ぶ。 完成！

【紙で着物を作ろう】

◇用意する物・・・はさみ、のり、色えんぴつ

◇作り方

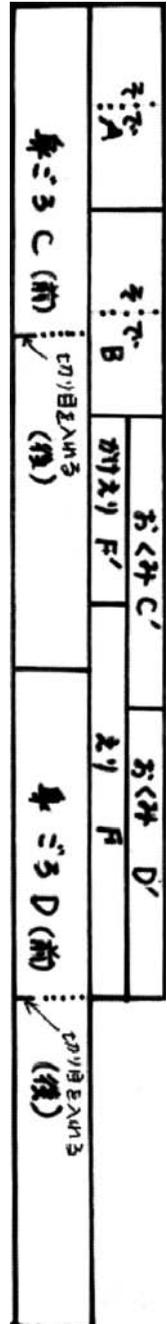
- ①右の型紙を拡大コピーする。(2倍くらい。大きめに)
- ②そでAと身ごろCを切り取り、半分に折り、下の台紙に貼る。
(左の身頃と袖ができた。)
- ③そでBと身ごろDを切り取り、半分に折り、②の横に貼る。
(右の身頃と袖ができた)
- ④おくみC'とおくみD'をそれぞれC, Dの身頃の前上に貼る。
- ⑤えりFとかけえりF'を半分に折り、折り目を合わせて二枚を重ねて貼る。(えりの上にかけてえりが付く。)えりを下向の三角に折り、身頃に重ねて貼る。
- ⑥すきな模様を描く。



<作業上の注意>

*型紙は、実物の1/20の縮尺で作ってある。小学生には小さいので拡大して使うとよい。

*部品は、その都度、切り取らせるよい。



体育の授業をもっと楽しく —ボールゲームづくりのヒント—

筑波大学附属小学校 木下 光正

1. 授業の概要

どこの国でも、子どもたちはボールゲームが大好きだ。赴任国でボールゲームをしたいと考える教師は多いと思われる。日本の小学校でボールゲームの授業を行うことにはそう困難はないだろう。しかし学校の状況の異なる赴任国で行うためにはいくつか乗り越えねばならないハードルがある。それについて考えたい。

2. 授業づくり 準備のポイント

実際ボールゲームを行おうとするとき、いくつか問題になることがある。カンボジアでの活動を前提に、私達が用意したり考えたことをもとに説明するので参考にさせていただきたい。

(1) こんなことが困る

1. ボールがない
2. コートはどうしよう
3. ネットがない
4. 小道具がない (得点板・ホワイトボード)

こんな点を解決するにはどうしたらよいだろうか。私達も出発前に考えた。そこで、「こんなふうにしたらどうでしょう」といういくつかのアイディアを示すので参考にさせていただきたい。

(2) 事前に何があるかをまずは確認しよう

—要チェック—

出発前に用具やコートなど実際何があるかを調べよう。すでに前任者がいる場合は、前任者とメールのやりとり等をしてチェックするとよいだろう。

もちろん、行く先がその学校とは限らないであろうから、地域や国内事情も含めて確認しておいた方がよいと思われる。

もし、前任者がいない場合は JICA や相手国の大使館に聞いてみてはどうだろうか。事前調査をしておかないと、行ってからが大変である。持ち込む場合は次の点のチェックするとよいだろう。

(ポイント)

- 持ち込みの重量制限があることを忘れずに
→ボールやその他の道具を持っていくときには、重量を確認しておきたい。
- グランドロープ用クイなどは特に重量がかさむ。
- ボールは空気を抜いて
→空気入れがあるかどうかともチェックを！

①ボールがないとき

まずは、それぞれのスポーツの協会に依頼してみてもどうか。一度にたくさんのボールの寄付は難しいだろうが、3～4個ならばすぐに寄付してくれることもある。この頃は各協会とも社会貢献の一貫としてこうした活動もしているのである。同様にボールメーカーに依頼するのも一つの手だ。

どんな種目にもある程度使える汎用性の高いボールを探すことがよい。例えばバレーボールや柔らかめのボールであれば、サッカー・ハンドボール・バレーボール・バスケットなどに利用することが可能である。

私もバレーボール協会から寄付していただいた。ただし、JICA などからの寄付の依頼書などが必要になることがある。JICA にも忘れず連絡しておきたい。

②コートがないとき

赴任国にもよるだろうが、小学校などでは体育館がある所は少ないようである。したがって、グランドで何でも処理するつもりの方がよいと思われる。こんなパターンでコートづくりをしてはどうか。

1) スズランテープを利用する。

スズランテープは結構頑丈である。ただし、釘などで打つのはやめよう。現地の人には裸足で活動することが結構ある。怪我をしないようにするには、小さめのグランドロープ用クイを用意することが必要だ。私の場合は、バレーボールコートをつくったようなものでつくってくれていた。ちょっと重いけど、グランドロープを持っていくのも一つの手である。

2) コーナープレートを持っていく

ディスクコーン、ソフトコーナーポイントなどさまざまな名称がある。コーナープレートは踏んでも弾力性があり、危険がない。ものによっても違うけど、1セット10～20個程度はあるから、2セットぐらい持っていくと便利である。サッカーなどで、広いコートをスズランテープで示すことはできない。そこで、マーカーで間隔を開けてあげれば簡単に準備することができるし、踏んでも心配ない。

3) ペットボトルを利用 (1.5リットルなど大きめのもの)

カンボジアではペットボトルが結構あった。ペットボトルに砂や土を1/3程度入れたものを利用してエリアを決めることもできる。

① ネットやゴールがないとき



カンボジアは比較的バレーが盛んだ。私が依頼されたのが講習会ということもあり、小学校でも写真のような立派なコートがあった。もちろん、他の学校にはほとんどないと聞いている。しかし、中学校や河川沿いの広場などにも支柱にネットが張られたところがあった。屋外のものは木の柱に漁師の網をはったものだった。



実はこれもアイデアの1つだ。木の柱を埋め込むことは大変だが、木の棒に2cmの平ゴムををつけたり、ビニル製のひもをつけるだけでも簡易なバレーネットができる。

スズランテープをわたしたひもに何本かぶら下げても雰囲気が出る。

この木の棒を両側で持ってもらえば簡易な支柱・ネットが完成するのだ。

同様に、左写真のような立派なサッカーゴールやコンクリート製のバスケットコートもあった。しかし、こんなゴールがないところもあるだろう。そのような場合は、ペットボトルを3本~4本まとめ、ガムテープや紐で縛る。すると真ん

中が空くので、ここに棒を挿して立て、スズランテープや紐を結べば、簡易ゴールができあがる。

ペットボトルには砂や土を入れ、倒れないようにしよう。それでも1m以上の高いものは安定性が無くなってしまう。

バスケットゴールは木の棒に下の抜けた籠をつけることもできるだろうが、棒をたてたり、籠の取り付けが難しい。

適当な台を置いて懐かしいポートボールにしたり、ペットボトルを台の上に載せ、それを倒すハンドボール型のゲームにすることも考えられる。

3. 授業づくり 実践のポイント

(1) 小道具を利用して授業をいきいきと

①得点板

写真の2人が持っているのが得点板である。作り方は次のようにする。

1) 画用紙(8つ切の半分程度)に油性マジックで得点を書く。0~30点もあれば大丈夫である。画用紙は厚手を使う。

2)パンチで穴を開ける

3)穴の補強

- ・ビニルパッチで止める
- ・穴を開ける前にセロテープをはっておく 等

いずれにしても、穴だけでは少し弱い。白ボールを使う手もあるが、厚くなりすぎる。台紙として白ボールがあればつけておくと壊れにくくなる。

4)リングで止める

これで捲れるようになり、得点板の完成である。

②ホワイトボード

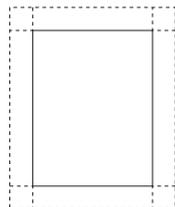
黒板やホワイトボードはグラウンドにはないだろう。

しかし、動きや対戦チームなど、図を書いたり、表を書いたりして説明したいときもある。こんな時はホワイトボード代わりになるものがあると便利だ(下図参照)。

白ボールに、粘着材付きのフィルム(ロール状のもので、ブックカバー幅のものや、もっと幅の広い模造紙大の幅のものもある。こちらの方が便利。)をはり、とめる。ここに、ホワイトボードペンで書けば、ティッシュや雑巾で拭き取ることが可能である。これも用意するのが大変なようであれば、クリアファイルに紙をはさみ、そこに同じように書くこともできる。何度も使えるところがミソである。



部分をカット



は粘着剤付きフィルム



体育の授業をどこでも楽しく —教材づくりのヒント—

筑波大学附属小学校 清水 由

1. 授業の概要

体育授業を行おうとすると、どのような国へ行ってもいくつか問題になることが必ずある。運動場や体育館、遊具といった施設の問題であったり、気温や雨季乾季といった気候の問題であったり、民族や宗教といった文化的な背景まで考えなくてはならないこともあったりするのではないかと思う。そのような日本とは異なるさまざまな環境の下で、私たちにできること。それは、楽しい体育授業をするということではないだろうか。どこの国の子どもたちもきっと運動が大好きだ。自由に運動をさせながらも、意味のある運動教材を提供し、その国の子どもたちの体づくりに貢献できたらうれしいものである。

ここではカンボジアでの活動を前提に、私達が用意したり考えたことをもとに説明するので参考にさせていただきたい。ここでは、全学年を対象に、応用のしやすい教材を紹介したいと思う。

2. 授業づくり 準備のポイント

体育授業の準備を考えると、困ったことがいろいろと出てくる。
例えば、以下の通りである。

1. 施設が整っていない
2. 暑すぎる（寒すぎる）
3. 教具がない
4. 手に入れることのできる材料の想像がつかない

ケースバイケースであることが多いのかもしれない。だが、できるだけ手作りで工夫のできることを、その土地でできることを考えていくことが必要なのではないだろう。

<様々な環境での工夫>

体育館はもちろん、運動場までも無いケースもある。カンボジアではそれらの施設が整った小学校はあまり無いというお話しであった。

体育館が無い場合は、芝生などでマット運動に取り組まなければならない。芝生と言っても、ふかふかの芝生ではなく、とても堅い感じのところもある。ゴザや段ボールを重ねて痛みを和らげる工夫をする必要があるだろう。

仮に広い運動場がある学校であったとしても、地面が固められておらず、走ったりすると土ぼこりが舞い上がるような運動場もある。乾期は土ぼこりで、雨期は水で浸ってベチョベチョになってしまったりするところもあるようだ。

土ぼこりが舞い上がるような運動場では、マスクを着用して運動することも考えられる。私たちが行ったところでは、実際に多くの先生方がマスクを着用して運動をしていた。それでも、そばで遊んでいた子どもたちはマスクをしていなかったの、それほど気を使う必要はないのかもしれない。



また、日差しが出ると非常に暑く、木陰に入らずに1時間の体育授業を続けるのは厳しいこともある。木陰を見つけておいたり、作っておいたりする必要もあるかもしれない。

学校の運動場に普通に牛などが入ってくるところもある。この牛(写真:右下)は、午後になると必ず現れて草を食べていた。来る時間が決まっているようなので、追い払うというのも一つの手だが、時間と場所を考慮に入れて計画を立てることも可能ではないか。



3. 授業づくり 実践のポイント

どこでもできる楽しい授業という条件を考えると、できる限り必要な道具が少ない方がやりやすいと思われる。道具を使用するとしても材料を現地調達できて簡単に作れるようなシンプルなものをお薦めする。

- いろいろと便利な「平ゴム」
- さまざまな領域の運動の基礎となる動きを繰り返し取り組める「折り返しの運動」
- みんなで称えたり、チーム意識を高めたりする「定型儀式」

「平ゴム」は、入手していく方が確実だが、現地調達も可能ではないかと思う。カンボジアでは、子どもたちが普段の遊びでゴム跳びをしていた。ゴム一つで、高跳びや幅跳び、側方倒立回転の教具として使用できる。写真は高跳びの例である。

高跳びでは、ゴムを持つ子と跳ぶ子に分かれて写真のように持ち、交代しながら



順番に跳ぶ。ゴムの位置を、膝、腿、腰、おへそ、胸、首、あご、おでこ、頭の上、というように徐々に上げていくとだんだん高く跳ぶことになる。メジャーがあれば、○cmと後から計ってもよいと思われる。1回1回計っていると運動量が減ってしまうので、だいたいの目安としておくとよいと思う。概ねへそまで跳べると十分ではないかと思う。安全面では、足の裏からしっかり着地

することを強調して、またぎ越すような跳び方を指導するとマットが無くても大丈夫だと思う。写真(上)の奥によく見ると立ててあるのだが、棒にゴムをつけて本格的な高跳びのようにしてもよい。運動場に棒を刺すことができ、いくつかその場を設定することができるのであれば、子どもたちは自由にそれをどんどん跳ぶ。実際、この講習会をやっている最中、まわりにたくさんの子もたちが見に来ていたが、棒を立てばなしにしておいたら、遊び始めて見よう見まねで取り組んでいた。

幅跳びでは、棒を砂場に刺してゴムを張り合格ラインとする。着地したらすぐに合否がわかるので、意欲的に取り組む。ゴムを斜めに張って距離の長いところ(コース)も用意すると、子どもたちはさらに楽しく取り組むだろう。

側方倒立回転も高跳びと同じようにしてゴムを持つ子と跳ぶ子に分かれて足を引っかけるようにする。側方倒立回転をしてゴムに足を引っかけるには、膝を伸ばして大きな側転をしなければならない。ダイナミックな格好良い側方倒立回転をね

らいにできる。

どこでも手軽に楽しく取り組める教材のお勧めは「折り返しの運動」だ。右上の写真はサッカーのドリブルを折り返し形式で取り組んでいるところである。4～8人1班で並び、様々な運動に取り組みながら目印（ラインやマーカー、ペットボトル、等）まで行って帰ってくるという形式の運動だ。

右の写真は、マット運動を折り返し形式で取り組んでいる。

基本的な運動ができれば、競争させたりすることでさらに意欲的に取り組ませることができる。

仲間意識を高める「定形儀式」も授業を盛り上げる効果的な方法だ。左下の写真は、ゲームの前にチーム全



員で円陣を組み、声をかけるという儀式である。「がんばるぞ！オー！」というかけ声と共に全員で手を上にあげる。

その右の写真は、勝ったチームにクラスの全員で褒める儀式である。「(拍手で) 1, 2, 3, (膝を叩いて) 1, 2, 3, (親指を突き出して) すごい！」と全員の口伴奏でチームを讃える。

※本稿で紹介した内容については、詳しくは拙著『子どもが動く授業マネジメントと折り返し運動』（学事出版、2006年）をご参照いただきたい。

日本の伝統文化を学ぶ

—「おはし、ちゃんと使えないの?」—

筑波大学附属小学校 加藤 宣行

1. 授業の概要

道徳で日本文化を扱うという学習は、郷土や国を大切に思う心を育むという内容に関連して行うことが多い。例えば、日本のよいところを探してみんなで話し合ってみたり、地域の祭りやその町ならではの特徴について考える展開を総合单元的に組んだりする。そのような体験活動や話し合い活動を通して、自分の住む所のよさに気づき、「いい町だな、もっと大切にしていきたい」と思うようになる。

今回は「おはし、ちゃんと使えないの」（光文書院4年）という資料を使った実践を紹介する。この話は、外国から来たベティさんが上手におはしを使うのを見たほうが、同じように里芋を掴もうとしてうまくできず、「日本人なのに…」と自分を振り返り、「日本人ならできなくてはいけないこと」について考え始めるというものである。これは日本の子どもたちに対して、自国の文化に触れ、尊重する意識を育むための実践であるが、これをそのまま外国の子どもたちに体験させることによって、日本の文化を学ぶきっかけともなると考える。

具体的な流れを言うと、1時間目の道徳の時間で実際におはしを使う体験をして、一週間間をあけて調べ活動を組み、2時間目の道徳の時間に再度考えるという、複数時間扱いの道徳授業の実践である。

2. 授業づくり 準備のポイント

私は子どもたちに「準備しなさい」と言う時、『物と心と身体の準備』という3つの観点で話をする。

(1) 『物の準備』

『物』は学習道具である。教師で言えば教材ということになるだろうか。本実践で使う（あらかじめ用意した方がよい）と予想される物は、次の5点である。

- ①おはし
- ②ビー玉などの小さくて掴みにくい物（小石でもよい）
- ③日本の文化的な慣習一覧表
- ④お箸の持ち方・使い方手本（インターネットで検索できる）
- ⑤折り紙習字道具

①おはし

これは、本来なら色々な種類の箸があると一番よいが、子どもたちが使う体験するという目的に限れば、割り箸でも、極端な話二本の木ぎれでも構わない。日本の子どもたちにこの体験活動をさせた時は、やはり割り箸を使ったが、ふつうの角があるものではなくて、あえて角がなくて丸くなっている物を使った。その方が、箸の使い方に慣れていない子どもには、物を掴みにくいと思われたからである。

②ビー玉は、資料の中に出てくる里芋のかわりである。つるつるで掴みにくいものなら、おはじき、小石など何でもよい。割り箸やビー玉は100円ショップでも売っている。

(2) 『心』の準備

『心』とは、感心・意欲ということである。教師サイドで言えば、いかに子どもたちに学びの必然性を持たせることができるか、ということになる。そのための演出も必要になる。日本古来の音楽をBGMで流すとか、「日本の料理店に入った時どうする？」などの状況設定をするなどの手だてを行うと、子どもたちも乗ってくるかも知れない。

(3) 『身体』の準備

これは『学ぶ身体』とでも言えばよいであろうか。姿勢とか態度とかの表面的な身体操作もさることながら、その学習をするに足る身体能力という観点も見逃すことはできない。本実践で言えば、おはしを使うという身体能力。これは一回や二回体験したとこでできるようになるとは思えない。何度もくり返し練習して、身体が学習効果を示し始めるのにある一定の時間がかかる。そのため、二週間という時間を設定した。

3. 授業づくり 実践のポイント

(箸の実物を見せて) みなさん、これは何か分かりますか？

そうです、おはしという物です。日本では、主にこれを使って食事をします。でも、日本人だから誰でも上手におはしを使えるかと言ったら、そうでもないのです。日本人でも、授業でおはしの使い方や日本文化の学習をしているのです。今日は、みなさんも日本の子どもたちと同じように「おはし、ちゃんと使えないの」という学習をしてみましょう。

実際に副読本の内容を読んで聞かせてやってもよいし、「みんなが日本に行ったら」という設定で全員に「おはし体験」をさせてもよい。その時に、日本の子どもたちの学習の様子を紹介してもよい。

二人ひと組になっておはしを使ってみましょう。

一人が手にビー玉を持ち、それをもう一人が箸を使って掴む動作を交互に繰り返しさせてみる。うまく掴めずに落としてしまうこともあるので、受け皿のような器を用意しておくともよいであろう。



何度か行ったら後、写真などを使って正しいはしの持ち方の指導をする。実際に教師が手本を示してもよい。

その後、再度練習させ、感想を出し合わせる。子どもたちは、日本の文化に触れた思いを、各自の言葉で表現するであろう。その時に、次のような日本の子どもたちの感想を紹介してあげてもよい。

日本の文化を守って暮らすことは、おはしの持ち方や日本茶を入れるなど、結構難しいことなんだと分かりました。ふだん気にならなかった日本の文化も、日本人として大事にしなくてははいけないと思います。

勉強してみて、日本の文化や歴史にまつわる物などに興味が持てました。これからは、日本を愛する心をもって、日本人ができなくてはならないことに挑戦していきます。

日本にはおはしだけでなく、特有の文化がいろいろとあります。知っているものはありますか？

おそらく、現地の子どもたちは「着物」「お寿司」「アニメ」「家電製品」「富士山」「カラテ」「サムライ」などと、様々な観点で日本についての知識を出し合うであろう。日本についての興味・感心が高まってきたところで、次のように投げかける。

日本の子どもたちに、「日本人ならこれができなくては」というものを考えてもらったら、次のような結果が出ました。

と言って、下の一覧表を見せる。

- ・折り紙で鶴を折る
- ・コマを回す
- ・たこ揚げをする
- ・相撲が取れる
- ・竹馬に乗れる
- ・お手玉ができる
- ・敬語が使える
- ・箸を正しく使える
- ・ゆかたを自分で着る
- ・習字ができる
- ・盆踊りが踊れる
- ・百人一首ができる
- ・20分、正座ができる
- ・まりつきができる
- ・鉛筆を正しく持つ
- ・あやとりができる
- ・味噌汁が作れる
- ・ごはんが炊ける

現地の子どもたちは、これを見てもイメージが湧かないものがあると思われる。そこで、来週までに家庭学習や社会科の時間などに調べたり、体験したりしてみようと投げかける。教師の方で用意できるものがあれば、一つでもよいから実物を教室に置けるとよい。例えば、百人一首、習字セット、お手玉、折り紙、座布団など。

日本の子どもたち対象に授業をした時は、これ以外にも「魚をさばくことができる」などの項目が出た。この学習を通して、日本のこともたちも日本人としての自覚を高めたようである。

さて、この学習をする外国の子どもたちは、日本に対してどのような認識を持つであろうか、また、自国の文化に対してはどうかであろうか。大変興味のあるところである。

ビー玉をはしてつかむことはできると思っていたけど、案外難しかった。私も日本人なのにベティさんよりはしの持ち方がおかしいとカッコわるいから、ベティさんのようにトレーニングをしようと思う。外国人に日本のことを聞かれて、答えられないと変だから、日本人として日本のことは知っておくべきだと思う。友だちの意見を聞き、日本語が正しく使えないと外国人にも失礼だと思った。

一週間後の道徳の時間に、再度「おはし体験」をさせてみる。そして一週間前との違いについて考えさせる。もちろん、おはしの使い方という技術的な変容も受け止めながら、日本の文化に触れた意識という観点での変容にもスポットを当てる。

私はお正月に習字をしました。その時私は、日本の文化はとても心が落ち着くなあと感じました。集中力がとても高まり、夢中になって何回も何回も書いていました。どんどんうまくなって行って、こんなに楽しく習字ができるんだと、日本の文化にびっくりさせられました。また、日本の文化にふれられたから楽しかったのかなと、今はそう思うようになりました。私が大人になって、日本の文化のおもしろさ、楽しさ、よさを心からわかってくれるように伝えられるといいなと思います。

これは、日本の子どもが授業後に書いた感想である。自国の文化に触れたことにより、「心が落ち着く」「自国の文化を伝えられる人間になりたい」と述べている。

発展として、おはし以外の日本文化に触れてみようという学習も考えられる。例えば、

習字に挑戦してみませんか？

日本の伝統文化、習字。これを現地の子どもたちにも体験させる。実物を見せてもよいし、習字の教科書をもとにして実際に書かせてみるのもよいであろう。そして、そのような活動をしている時、自分がどんな気持ちになったかをあとでシェアリングできる場を設定するのである。

4. よりよい授業にするために

私は日本での「総合的な学習の時間」の6年生の実践で、「日本の文化を海外の人に伝えよう」という単元を組んだことがある。具体的に外国に在住する人を特定し、あの人に何を伝えたいか、どうやって伝えるか、グループで話し合い、まとめたのである。想定した外国の人は、親交のあったアメリカ人、ロシア人の方々である。

例えば、「習字を伝えたい」というチームがあった。実際に自分たちで習字の練習をして書いている様子を写真に撮ったり、書いたものに対する説明をどのようにするかを考えたりする。

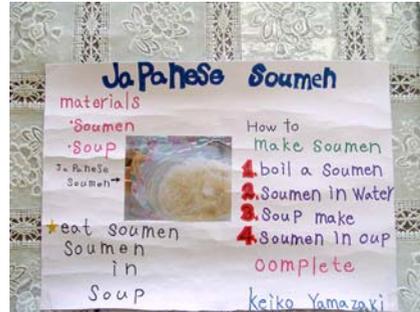
この写真は、習字についての説明をアメリカの人に分かるように書くため、中学校へ行って英語の先生にアドバイスをもらっているところである。このような活動を通して、子どもたちは、日本の文化を見なおし、日本人としての自覚を増すと共に、外国の人とのコミュニケーションに必要なものを体験を通して学び取る。知らず知らずのうちに国際感覚が身についていく。

もし、このような取り組みの学習物があれば、それを現地の子どもたちに見せることによって、さらに学習が深まることであろう。教師が教えるだけでは伝わらなかったものが、日本の子どもから現地の子どもへのメッセージとして伝わるのではないかと考える。子どもが子どもに教える、学び合う、この学習効果は想像以上に大きい。

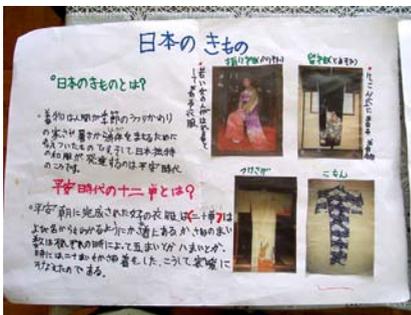




●和食・そうめん・日本語バージョン



●そうめんの作り方・英語バージョン



●日本の着物紹介



●正座の練習をする四年生

これらの活動を通して、現地の子どもたちに、日本の文化の紹介をすることができ、日本に対する理解が深まると考える。そして、きっと自分たちの国の文化について思いを馳せるであろう。そこから、日本の子どもたちのように、自分たちの国の文化を日本の子どもたちに紹介しようという学習につながっていったらおもしろい。

そのような学習のやりとりを積み重ねることによって、自分の国のことなのに知らなかった、できなかったことが意外と多いことに気づき、自国の文化の持つ意味やよさについて改めて実感するチャンスとなる。自国の文化をきちんと理解し、大切にできる人間を、それぞれの国で育てることで、本当の意味での国際理解教育が可能となるのではないだろうか。

帰国後の教育実践のための具体的な準備

筑波大学附属小学校 鎌田 和宏

赴任中から帰国後の準備を始める

現職派遣教員は、帰国後に赴任国を事例にして国際理解教育の実践に取り組んでいる。いざ、実戦に臨んで単元設計を行おうとする時に「こんなことをしておけばよかった」「こんなものを入手しておけばよかった」等、改めて気づくことも多かったと聞いている。現地のカウンターパートの方に依頼したり、後任の隊員等がいる場合はその方をお願いしたりと、派遣隊員の築いたネットワークを利用して対応されている場合がほとんどだが、対応不可能なものもある。具体的には次章の帰国隊員の実践事例を参照していただきたいが、ここで少し必要な事柄をまとめておきたい。

1. 記録をとる

ほとんどの方がされていることだが、自身の派遣記録をとっておくことは重要である。この記録を元に、様々な単元開発が行える。その際に重要なことは写真や動画、音楽、具体物等、感覚に訴える資料も同時に記録しておくことである。赴任国の状況にもよるだろうが、デジタルカメラやビデオカメラを携帯し、常に資料が撮れるように状況にしておくといえよう。ビデオカメラは大きいという印象があるが、最近のものはSDカードなどのメモリーカードに記録する極めて小型のものも出ているし、デジタルカメラの動画撮影機能を利用するのもよいだろう。隊員自身の経験したことそのものは、後付で記録し直すことは不可能である。日誌などを書かれる方は多かろうが、その日誌と関連づけて、写真や動画等、授業で利用する時に子どもに訴えるデータを蓄積しておくといよい。

ただし、デジタルカメラの写真などは、気軽にたくさんっておけるために枚数が膨大になり管理が大変になるという問題が生じてくる。赴任国の事情にもよるだろうが、現地にPCを持ち込まれる方がほとんどだと思われる。写真等は撮影したらできるだけ日を置かず、日毎やイベント毎にフォルダを作成して整理するとか、写真整理用のソフトウェアを利用して整理するなど、現地で整理を行えるような用意をしておくといえよう。派遣前にBlogサイト(容易に更新可能なインターネットのホームページ)をつくらせ、派遣中の出来事をリアルタイムで発信されている隊員の方もいらっしゃる。これは、赴任国のインターネット事情にもよるだろうが、記録をとり、その場で整理していくことによって帰国後の実践の基礎資料ができあがる。

2. 幅広く赴任国を知るよう心がける

赴任中は、取り組まれる仕事で多忙を極められるだろうが、機会を捉えて幅広く赴任国の状況を見聞できるよう心がけるとよいようだ。赴任国の代表的な場所に出かけたり、代表的なイベントを見たりと、赴任国を概観できるような経験を持っておきたい(もちろん安全第一とし、赴任国の人々・文化等を尊重してのことであるが)。

現職派遣教員は帰国後の実践の中でその国の紹介者として機能することになる。紹介者としては赴任国に対して多面的な見方ができるようになりたいものである。国際協力という仕事の性質上、公的な立場で現地の方々に接することが多いだろうが、すでに帰国された現職派遣の教員の方々の経験を伺うと、仕事を進め、交流を深める中で、立場にとどまらない人間関係を築かれている方が多い。そのような人間関係に支えられた現地の人や生活文化等に関する理解は、深く、そして多様な価値尺度の獲得をもたらすであろう。慎重に、しかし積極的に現地の人々・社会等の関わりを深めていただきたい。

3. 帰国後の実践に利用できそうな物を集める

過去の実践を見ていると以下のような物・事を入手しておく、帰国後の実践に有益であるようだ。実物を持ってこられる物は実物を、持ち帰れぬ物は写真や動画で記録したり、自身で覚えておきたい。次章以降の実践記録も見いただき、計画的に(ある一定時期にしか見られない物もある)収集できるとよいだろう。

1. 赴任国の様子を概観できる物・事

地図、絵はがき、ポスター、写真(季節、土地の様子—地形・景観等—、代表的な土地の様子、植物、動物等がわかる映像資料は効果的)等

2. 赴任国の生活を概観できる物・事

現地の言語(文字)に関する資料、民族衣装、住居の資料(現地の気候や文化的背景がわかるところは重要)、民具、食生活の資料(主食、日本に輸出される農産物・食品、固有の食材、料理—覚えれば日本で再現可能—)等

3. 赴任国の文化・芸能を知り、体験できる物・事

民族音楽(歌・楽曲などのCDやDVD、楽器、譜面等)、民族舞踊(衣装・楽器、覚えれば日本で再現できる)、伝統芸能、祭祀等に関する物・事等

4. 子どもに関する物・事

子どもの生活(学校生活、仕事、楽しみ、お菓子等々。学校生活の動画像は特に欲しいところ)、遊びに関する物(おもちゃ、スポーツの道具等。遊んでいる風景の動画像)